

端午節の儀礼にみる水上生活者たちの所属意識 —中国福建省九龍江河口に暮らす連家船漁民の事例から—

藤川美代子※

1. はじめに

主に漁業や水上運搬業を営みながら水上に浮かぶ船のなかで暮らす人々は、一般的に“Sea Nomads” “Sea Gypsies” 「漂海民」「漂泊民」「水上居民」「水上生活者」などと呼ばれている。こうした人々は、東南アジア各地、中国大陆の南部、また日本列島などを含むアジアの各地に、散在的に広がっていた¹⁾。ここで、中国に眼を向けると、水上生活者たちの居住範囲は、北は浙江省、南は広西チワン族自治区にまで広がり、なかでも福建省・広東省・広西チワン族自治区の沿海部や河川にもっとも集中している。船を家として暮らしをたてる水上生活者たちは、中国の歴史のなかでは「蜑民」「蜑民」「蜑戸」などと呼ばれ、一説には、およそ2000年前の秦朝期にはすでにその存在を知られていたともいう²⁾。長きにわたる歴史のなかで、中国の水上生活者たちはその特殊な生活様式から、陸地に定住する人々からの差別と排除とを経験している。たとえば、明朝期には陸地に住む有力者たちによって社会的地位の比較的高い職業に就くことを阻まれたり、陸上に住む人々との通婚を許されなかったり、陸地に土地をもち、定住することさえも禁止される³⁾ など、水上生活者たちが受けてきた差別ははかり知れぬほど大きく、社会的にはいわゆる「賤民」⁴⁾ として位置づけられてきた。

上に挙げた中国の蜑民はこれまで、研究者たちによってその由来が越族やチワン族・モンゴル族・ヤオ族あるいはインドシナ半島のあたりから中国南部・東南部にやってきた人々と結びつけられるなどしており⁵⁾、中国社会の多数派である漢民族とは異質の存在とみなされることも多かった。しかし、1950年代に始まった民族識別工作のなかで、各地の蜑民は漢民族として判定され、その呼称も水上居民へと改められるようになった⁶⁾。その後は、広東省や香港の水上居民を対象とした形質・文化人類学的な研究が主流であった⁷⁾。

本稿では、これまで研究者にはほとんど注目されてこなかった水上生活者、福建省の東南部を流れる九龍江の下流域で暮らしてきた「連家船漁民」の人々に注目する。彼らの多くは現在、S漁業社区と呼ばれる地区に定住の地を得ている。旧暦の5月5日を中心とする端午節の期間にS漁業社区でおこなわれている一連の儀礼と、この儀礼がおこなわれるようになった背景とに眼を向けると、連家船漁民たちが長きにわたって歩んできた水上生活者としての歴史と、定住する土地を獲得するようになった過程とを理解する必要性に迫られる。さらにそこからは、連家船漁民の人々が抱いてきた所属意識の変化を読みとることができる。

※神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程

わたしは、福建省アモイ大学に留学中の2007年1月、アモイ島のすぐそばを流れる九龍江河口に位置する、ある漁村を訪れていた。漁村には、大きな九龍江から支流が一本流れこんでおり、橋から河を見下ろすと、何艘も列をなして岸辺に停泊する小さな木船の姿が眼にとびこんできた。ある者は、甲板のうえで破れた網をつくろい、ある者は船底のはがれたペンキを塗りなおし、またある者は船に据えつけられた竈でこれから食べる昼食の準備をする……船のうえで繰りひろげられる彼らの一挙手一投足すべてが、わたしにとっては新鮮なものだった。彼らはどのような生活を送っているのか？彼らはどこからやって来たのか？彼らはどのような歴史を歩んできたのか？心のなかにはさまざまな問いが湧きあがり、わたしは一瞬のうちにこの漁村で調査・研究をすることを決めてしまった。この漁村こそ、古くから九龍江河口で漁撈や水上運搬業を生業としながら船上での生活をつづけてきた連家船漁民たちの集うS漁業社区であり、わたしが研究のなかで主な対象とする調査地でもある。

わたしがこの漁村で調査・研究をすすめる過程は、彼ら連家船漁民たちが社会的な少数派として生きてきた歴史を知る過程であり、それと同時に、わたし自身がこの漁村という1つの小さな社会において、いかに無知な少数派として存在しているか、という現実をつきつけられる過程でもあった。連家船漁民の人々は小さなころから両親とともに漁をしながら船で生活するのが一般的で、陸地での定住を余儀なくされる学校での教育を受けずに育った者が多く、この漁村では字が読み書きできず、標準中国語を話せない人が40代以上のほとんどを占めている。方言の話せないわたしはじめ、漁村の人々から標準語中国語しか話さず、外国の大学に籍を置く一種の「知識分子⁸⁾」として受けとられていたはずである。しかし、時間をかけて彼らと接するうち、連家船漁民の人々はしだいにわたしが実際には魚の名前も漁の方法も知らず、そしてトイレのない船のうえでどのように用を足せばよいのかさえもわからない、まったく子どものような存在であることに気づいていった。そしてこれは、連家船漁民たちとわたしのあいだの距離をより近いものにするうえでとても大きな気づきとなった。彼らは、変てこで舌足らずな方言を話しはじめたわたしを、「お偉い博士生⁹⁾」としてではなく、ひとりの「何にも知らない、何でも見たがり聞きたがる、何でも写真に撮ろうとする奇妙な『日本査某¹⁰⁾』」として受け入れてくれるようになったのである。その一方でわたしのほうも、文献などで多く語られる、「社会の多数派から排除され、差別や貧困と戦う悲惨で苦しい少数派の水上生活者たち」というきわめて一面的で限定的なイメージを、自然なかたちでとり払うことができるようになっていた。たしかに、現在でも連家船漁民たちの多くは経済的に決して恵まれているとはいえず、学校教育の機会も十分に与えられているとはいえない。しかし、漁村を中心として毎日くりひろげられるのは、彼らが街なかの市場でその日捕れた魚やエビを売り、街角で出会った農村や都市に住む友人たちと世間話をしながら笑いあい、ときには河の堰き止めや学校の廃止をめぐるって地方政府に物申す、どこにでもある普通の生活であり、連家船漁民たちも自分と同じ「人間臭さ」のつまった普通の人々であるというごく当たり前のことに気づきはじめてためである。こうして、連家船漁民たちの差別と排除の歴史と現実の理解に努めながら、一方で彼らのごく普通の

日常生活を知りたい、というのがわたしの切なる願いとなった。したがって、以下で描かれるのは、船や漁、中国社会についてまったく無知であったわたしが、まず彼らと意思疎通を図るところからはじめ、「わからないから覗き、尋ねる」という作業を重ねるなかですくいとられたことが中心となっている。

2. 調査地S漁業社区の概況と歴史

連家船漁民とは、ごく最近まで陸地に定住することなく、福建省の九龍江や海洋で漁業や水上運搬業を生業とし、船を住み処としながら生活してきた人々が、自らを称して用いる言葉である。ここではまず、連家船漁民の人々が多く暮らしてきた九龍江と、彼らが現在集中して居住するS漁業社区について、その概況を紹介したい。その後に、彼らがこれまでに歩んできた歴史背景について、時系列的に簡単な説明を試みる。

(1) 九龍江とS漁業社区の概況

九龍江（図1を参照）は、古く「九つの龍が戯れた河」ということからその名がついたともいわれ、福建省の西南部（北緯24° 12′ ～25° 44′、東経116° 50′ ～118° 02′ のあいだ）を流れ、大きく北溪と西溪の2つに分かれて台湾海峡へと注ぎこむ河である。その全長は1,923km、流域面積は14,741km²におよんでいる。これは福建省全土の土地面積のうち12%を占めるもので、



図1：九龍江下流域に位置するS漁業社区（Google地図^①をもとに、筆者が加筆・修正したもの。）

^①<http://maps.google.com/maps?hl=zh-CN&tab=w1>を参照。

省内では福州近郊を流れる閩江に次ぐ2番目の大河である¹¹⁾。

本稿で研究の対象とする連家船漁民が多く所属するS漁業社区は、九龍江の河口に位置するコミュニティである（図1を参照）。ここは、福建省漳州市内（図2を参照）にある県レベルの龍海市によって管轄される最小の行政単位であり、また旧暦5月の端午節にはともに龍船を漕ぎ、1年の豊漁と安全を願うなど、村落祭祀を担う単位としての性格ももちあわせている。

S漁業社区の住民はいずれも中国政府が定めるところの「漢民族」に属しており、男性・女性ともに張・欧・阮・黄・楊姓の人々がその大多数を占めている。2006年にコミュニティ内の自治組織である居民委員会が発表した統計によると、住民は1,258戸、4,544人で、そのうち満15歳以上の労働力人口に当たるのは2,169人である。そのうち、漁業や漁獲物の水上運搬、また九龍江の河底から砂を掘り出す仕事など、水上での職業に従事する住民は1,677人おり、これは全労働力人口の77.3%に値する数である。それ以外では、地元の水産加工工場や機械工場、衣服の縫製工場、台湾資本の靴工場などで働いたり、病院や個人の家庭で清掃の仕事に就いたりする者¹²⁾が多く見受けられる。その一方で、船を新たに所有して漁をはじめるといふ人を見かけることはほとんどない。より詳細な悉皆調査が必要だが、現在のところ、S漁業社区では若者の漁業離

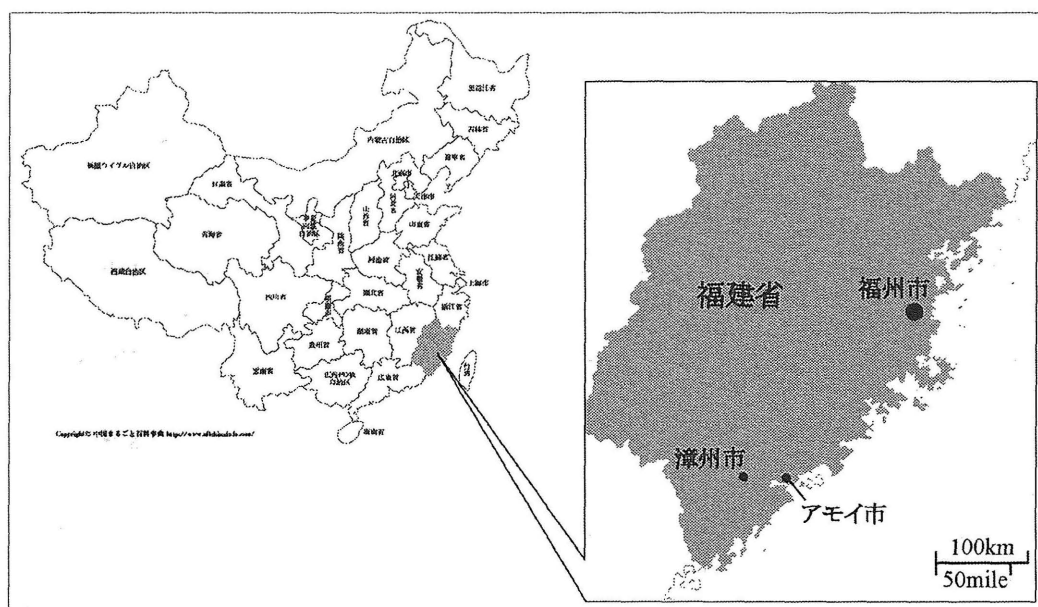


図2：中国における漳州市の位置

（左上は、中国まるごと百科事典が提供する白地図^②をもとに、筆者が加筆・修正したもの。）
右下は、Google地図^③をもとに筆者が加筆・修正したもの。

^②http://www.allchinainfo.com/profile/city/china_whitemap.htmlを参照。

^③<http://ditu.google.com>を参照。

れがすすんでいるとみることができるだろう。

(2) S漁業社区形成の歴史的背景

A. 「船=家」の暮らし

S漁業社区が形づくられてきた歴史背景をみてみよう。ここは、ほかの一般的な漁村とはまったく異なる歴史のなかで生まれたコミュニティである。先にもたびたび強調してきたが、歴史的に、S漁業社区の住民たちやその祖先たちは、陸地に定住する土地や住居を所有せず、家族で船を住み処として九龍江の上を漂いながら漁をしたり、水上運搬業に就いたりしながら暮らす、いわゆる水上生活者であった。S漁業社区の人々のあいだに伝わるところでは、彼らの水上生活者としての歴史は600年にも700年にもほるといい、彼らの祖先たちは元来、九龍江の沿岸部にある農村で農業を営む農民であったという。こうした農民たちのなかで、旱魃や飢饉などにまわられて貧窮した人々が農業を離れて川や海へ下り、しだいに漁撈や水上運輸などを暮らしの糧とするようになった。そうして長い月日をへるうちに、船を住み処として、日常的に九龍江の上を漂いつづける人々も数多く現れてきた。S漁業社区の住民たち、またその祖先たちというのは、まさに何世代にもわたり、船で産声をあげ、船を庭として育ち、船から船へ嫁ぎ（妻を娶い）、船で子どもを産み育て、船で老い死を迎えるという暮らしをつづけてきた人々である。

B. 「水鴨仔」「曲蹄仔」と蔑まれて

かつての生活を思い返すとき、S漁業社区の年老いた漁民たちはよく、「たまに船から降りて陸へ上がると、近くの農民たちから『鴨が歩いてきたー、船に帰れ帰れ!』って言われたもんだ。だから、子どものころは怖くて1人で道を歩くこともできなかったよなー。大人の後ろをくっついて街にでるしかなかったもん。しかも、お金がなくて靴なんて買えないから、どこへ行くんでも裸足でね…」、「おれたちは、結婚っていうと、自分と同じように船に住んでる女とするもんだって思ってた。親同士もそういう考えがあるから、年のころが合う女がいるっていうと親戚や知り合いをとおして紹介してもらって、すぐ結婚を決めたもん。船で作業するときなんかに近くなって、おれも嫁になる人とは顔見知りではあったけど、でも結婚するまで一言もしゃべったことなかったよ、それでも結婚したんだよな。あのころは、陸に住んでる人のことは娶れないって思ってた。お金もないし、住む土地もない、新居も用意できない、そんな男とどこにだれが嫁に来る?」という類の話を口にする。

船を家として水上生活を送る人々は古くから中国各地に存在したといわれ、「蜆民」などという蔑称で呼び表された。彼らのほとんどは陸地に田畑や居住する土地をもつことを許されず、陸地の人々との通婚が禁止され、また官吏登用試験である科挙の受験資格を与えられないなど、生活のあらゆる面で差別的な待遇を受けており、いわゆる「賤民」として扱われてきた。また、そのほとんどが貧困にあえぐ日々を送っていた。

九龍江で暮らしていた水上生活者たちもその例外ではなく、陸地に定住しながら農業に従事

する附近の農民たちから、「水鴨仔」または「曲蹄仔」などと呼ばれて蔑視の対象となってきた。「水鴨仔」「曲蹄仔」いずれの場合も、「仔」というのはこの地域で多く用いられる方言（閩南語）独特の言い回しで、少なからず悪意を込めて使われる表現である。「水鴨仔」とは文字どおり、常に水の上を漂いながら船で暮らす水上生活者たちの姿を、川べりで泳ぐ鴨やアヒルに喩えた言葉である。もう1つの「曲蹄仔」とは、農民たちが水上生活者の身体的特徴を強調してつけた呼び方である。九龍江で暮らす水上生活者たちの多くは、祖父母から孫までの3世代がともに1艘の小さな小さな木造の船の上で生活することが多かったといい、未婚の孫たちを含めて10人以上が寝起きをともしにすることも珍しくなかった。ある者は甲板の上で、またある者は甲板の下に区切られた空間で寝るのだが、どちらも小柄な大人が足を伸ばして眠ることもできないほど小さな場所である。こうした環境で生活するうち、水上生活者の多くは直立したとき、両足の膝のあいだが大きく開くほど下肢が湾曲してくる。そこで、周囲の農民たちは水上生活者のこうした様子を指して「曲蹄仔」と呼んだのだという。

C. 「連家船漁民」と「漁船幫」

ところで、九龍江で暮らす水上生活者たちは自身のことを「連家船漁民」と呼ぶことが多い。これには、「家族を連れて船に降り、船で暮らす漁民」という意味が込められている。彼らの乗る小さな木造の船は、「連家船」と呼ばれた。連家船漁民たちは九龍江下流地域に広がって漁をしたり、漁獲物・木材・日用品などの運搬をおこなったりし、作業をおこなわない時間や休漁期や年越しの時期になると各地の港湾に集まって停泊していた。連家船漁民たちの記憶によれば、彼らの停泊拠点となった港湾は、多いときで大小あわせて36ヶ所、主なもので10ヶ所にもおよんだという。

水上を移動しながら漁をおこなう連家船漁民たちにとって、船を停泊させる港湾は季節によって異なることも多々あったが、彼らの多くは、自らの拠点ともいえる港湾をもっていた。こうした港湾は通常、九龍江下流地域の沿岸部にある農村に所属しており、船を停泊させる連家船漁民たちのほとんどが、各農村の農民たちと血縁関係にあるという考えをもっていた。たとえば、「わたしたち張姓の祖先は、元来〇〇農村の農民だった」というように。実際のところ、連家船漁民たちは族譜のように自らの出自を体系的に示す文字記録をもっておらず、一方、農村に住む農民たちのあいだに伝わる族譜のなかにも連家船漁民たちにつながるような記載はない場合が多いようである。したがって、当時、農民たちの側に、連家船漁民とのあいだに血縁関係があるという意識があったかどうかについては、知る術がない。しかし、とにかくにも、連家船漁民たちの側からみれば、各港湾には祖先を同じくし、血縁関係で結ばれた（と考えられている）漁民たちが船を連れて停泊していた。こうして長い年月をへるうちに、同じ港湾を停泊拠点とする人々や近隣の港湾で停泊する人々が集まり、それぞれ「漁船幫」と呼ばれる自助的なグループを形づくるようになったという。

それぞれの漁船幫に所属するのは、必ずしも1つの姓から成る連家船漁民とは限らず、たとえ

ば、張姓のグループと、これとは別の血縁関係で結ばれた黄姓のグループといった、複数の同姓グループが集まって1つの漁船幫を形づくる場合が多かった。これらは各港湾のある農村や集落の名前を冠して「〇〇漁船幫」と呼ばれ、人々の記憶によれば、主なものでは10の漁船幫が存在した。これらの漁船幫は、船隊を組んでともに漁撈をおこなったり、共通の^{アンゴン}厝公（＝閩南語で神明、カミサマの意）を祀ったりする1つの社会共同体として機能した。

ここで、中華民国期の各漁船幫の概況をみてみよう。表1は、S漁業社区が現在までに把握している1926年（民国15年）当時の概況をもとに作成したものである。移動を生活の基礎とする連家船漁民と連家船の数を国や地方の機関が把握するのはいつの時代もむずかしく、船の数には大幅な揺れがあり、この統計もまったく不完全なものであるが、当時の概況を知る手がかりにはなるはずである。また、表1中の①～⑨に対応させるかたちで、各漁船幫が停泊の拠点としていた主な港湾の大まかな位置について、地図上に示したのが図3である。実際には、彼らはこれらの港湾の付近に散在するかたちで船を停泊させており、ここでは、拠点となった港湾が

表1：中華民国期の九龍江下流における連家船の数^④

漁船幫の名前	（停泊拠点）	手抛網漁船（艘）	虎網漁船（艘）	運搬船（艘）	合計
流伝漁船幫	①	7	0	0	7
石美漁船幫	②	44	26	0	70
海滄漁船幫	③	不明	不明	不明	不明
中港漁船幫	④	10	0	0	10
浮宮漁船幫	⑤	5	16	0	21
海澄漁船幫	⑥	7	4	7	18
龍海橋漁船幫	⑦	7	20	0	27
福河漁船幫	⑧	34	0	0	34
洲頭漁船幫	⑨	9	34	0	43
溪墘漁船幫	（現在調査中）	7	0	0	7
（わかっている全漁船幫の船の総計）					237

④同じS漁業社区がもつ別の資料では、中華民国期の九龍江下流地域には、大小合わせて425艘の連家船が存在し、その停泊港湾は15地域に及んでいたとも、別の資料では連家船の数は364艘であるともあり、その数はまちまちである。これらはいずれも、「連家船」や連家船漁民たちの数を把握することがどれほどむずかしいかを表している。

九龍江の河口に点在していたことを確認するにとどめたい。

D.自分たちの人民政府設立へ

中華民国期まで、こうした各漁船幫の人々は、停泊拠点である港湾が所属する農村に管轄されるかたちで統治されていた¹³⁾。中華人民共和国成立後の1949年から1950年にかけて、連家船漁民たちはそれまで管轄されていた農村内の組織を離れ、分かれて当時の漳州市内に2つの水上郷人民政府を立ちあげた。こうして連家船漁民の人々は農村部からの独立を果たし、小規模ながら自らの人民政府を成立させることに成功したのである。しかし、このころになっても人々は依然として陸地には田畑や居住のための土地をもたず、漁船や運搬船で移動生活をつづけながら人民政府に所属しており、この点で定住を生活の基盤とする一般の農村・漁村とはまったく異なるかたちをとっていた。その後、1952年になると、毛沢東政権の下、2つの人民政府は「互助組」となり、名称の改変を重ねた。ついに1958年、それまで2つに分かれていた九龍江下流域の連家船漁民たちは1つにまとめられ、S漁業生産合作社と呼ばれる組織のなかに統合された。

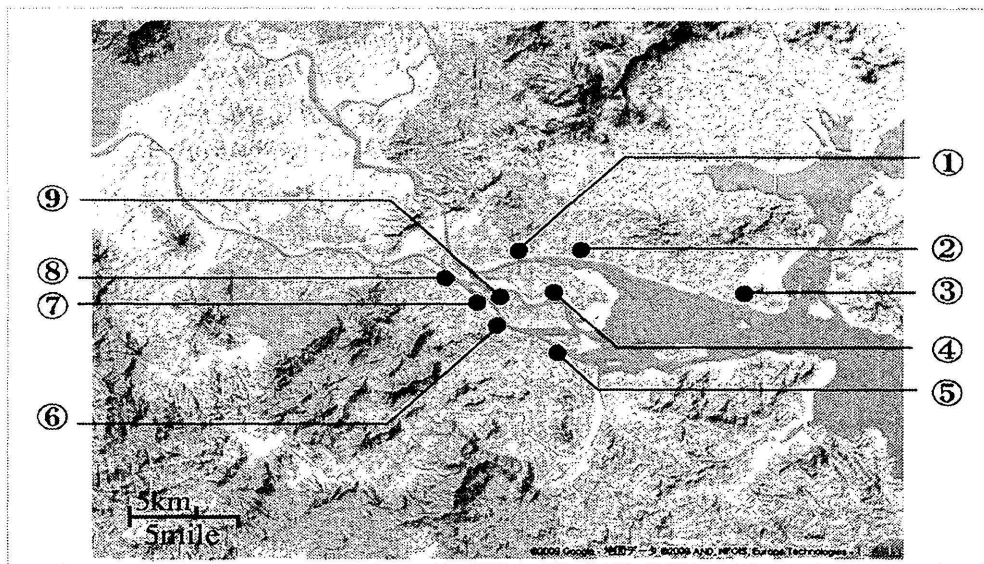


図3：中華民国期の各漁船幫の停泊拠点〔番号は、それぞれ表1の「停泊拠点」に対応。〕
(Google地図[®]をもとに、筆者が加筆・修正したもの。)

¹³⁾<http://ditu.google.com>を参照。

E. 台風の大被害——自分たちの土地を手に入れる

1959年8月23日、100年に一度ともいわれるほど大きな台風がアモイ、九龍江河口一帯を襲った。当時、台風の進路変化が急激で連家船漁民たちが長年培ってきた天気予測術では対応できなかったこと、彼らの多くがラジオなど情報媒体をもっておらず気象情報を聞くことができなかったこと、またたとえもっていたとしても当の気象予報がさほど正確でなかったことなどが重なって、連家船漁民のうち132人が溺死し、漁船327艘が破損する大惨事となった。しかし、この大惨事を引き起こす根本的な原因となったのは、連家船漁民たちの生活形態そのものだったといえる。陸地に土地をもたず、住居ももたない連家船漁民たちは、台風がきても陸地へ避難することができない。前もって準備できたとしても、彼らは船をどこかの港湾に停泊させ、船のなかでただ台風が過ぎ去るのを待つことしかできないのである。

この台風襲撃によってもたらされた大惨事をきっかけに、S漁業生産合作社を管轄下においていた当時の漳州市龍溪県人民政府は連家船漁民たちの居住問題に目を向けるようになった。そして、県内にある九龍江付近の2つの農村に命じて、耕作用地をS漁業生産合作社に譲渡させ、14万元を投じて連家船漁民たちのための集合住宅2棟を造った。これによって、部分的ながら116戸、348人の連家船漁民たちが陸上に住み処を手に入れることができたという。当時の様子をふり返り、S漁業社区の人々は口々に「あの家は小さかった一、寝るところも、ごはん作るところも同じで、トイレもなくていつも外の公衆便所まで行かなくちゃいけなかった」というが、長い移動生活に終わりを告げ、人々はとにもかくにも、小さいながらも自分たちの定住拠点を獲得することができたのである。

この新たな定住拠点こそ、現在のS漁業社区がおかれている場所である。このころから、まだ陸地に家をもたず、九龍江下流の各港湾に停泊拠点を置いていた連家船漁民たちも、漁船幫ごとの単位で次から次へとこの定住居拠点へと移動しはじめ、コミュニティ内を流れる九龍江の支流に船を停泊させるようになったという。1977年1月、それまで隣の鎮に所属するかたちで管轄されていた連家船漁民たち17戸がここへ移動してきて、ようやく現在のS漁業社区の原型ができたといえる。S漁業生産合作社は、漁撈大隊・人民公社漁業大隊・人民公社漁業大隊生産班子・S公社漁業大隊革命委員会・S漁業大隊管理委員会・S漁業村などその名称を変え、2003年にS漁業社区となった。この間、連家船漁民たちはときに地方政府とかけあい、ときに自分たちで金銭を工面し、土地を手に入れて集合住宅を造り、また個人で附近の農村や街なかにある分譲住宅を手に入れたり、賃借りしたりしながら、自らの定住基盤を獲得してきた。こうして現在までに、およそ20戸、50人ほどの漁民を除く人々が陸地に住居を手に入れている。このほか、主に経済的な困難から陸地に住居を得ることができず、古くなって使用されなくなった木造の船に木で強固な屋根や窓をつくりつけたものを河岸に据え、そこを住居として定住する人々もいる（写真1、2を参照）¹⁴⁾。

3. S漁業社区の端午節

ここからは、毎年旧暦4月29日から5月6日の端午節¹⁵⁾を中心とする期間に、S漁業社区でおこなわれる一連の儀礼についてごく簡単にまとめながら、人々の所属意識の問題に注目するかたちで、読みとれる事柄をいくつか挙げていきたい。これらの儀礼について理解を深めるために、まず、これまで連家船漁民の人々によって神明を祭祀することがどのようにおこなわれてきたのか、その点についてみていく。

(1) 個人厖・角頭厖・幫頭厖

羽原又吉や可児弘明は、中国の水上生活者たちについて、日常的に多くの危険をともなう彼らはおしなべて厚い信仰心をもつ人々であるという¹⁶⁾。九龍江付近で暮してきた連家船漁民たちもその例外ではなく、日常生活において実にさまざまな神明を祀る。福建省南部や台湾で広く使われる方言の閩南語では、神明を指す総称として、「厖」という語を用いるが¹⁷⁾、連家船漁民の人々は、さらにこの語の後ろに、年齢の高い男性に対する尊称の1つである「公」をつけ、「厖公^{アンゴン}」という語で神明一般を呼んでいる¹⁸⁾。S漁業社区の資料集『連家船』によれば、彼ら連家船漁民たちが祀ってきた厖公には、水仙王・媽祖・佛祖・上帝公（玄天上帝）・太子爺公・関帝公・保生大帝・三媽夫人・虎将公・安茶公・浮嶼王爺・刺魚王・漁仙王・虎爺・馬爺・牛爺といったものがあり、その数の多さがうかがえる¹⁹⁾。

先述の可児は、香港の水上生活者たちが超自然的存在についてどのように把握しているかを理解するのはむずかしい問題であるとしながらも、それが少なくとも4種類に分類されるという。すなわち、妖怪、好神、靈魂、正神の4つである。妖怪は、目に見えない存在として、人間に悪さをするもので、好神は、同じく目に見えない存在として人間に善意的な働きをするものであり、改まった祭壇や祠をもたず、格式ばった儀礼をともなわないことを特徴とする。靈魂のうち、ある程度現実の世界に即した存在で、祀ってくれる子孫や縁者がいないために疫病などをまきちらして人間に祟るものは野鬼と呼ばれ、これと反対に、子孫が祭祀することにより人間に祟ることのない靈魂は家鬼と呼ばれる。さらに、正神とは、靈魂と同じく、ある程度現実の世界に関係する超自然的存在として、祭壇に祀られるものを指している²⁰⁾。可児のこの分類に従うならば、九龍江で暮らす連家船漁民たちが厖公という言葉で呼び表すものは、正神と呼ばれる超自然的存在に該当するといえる。

連家船漁民たちは、船の上で生活するなかで、どのように厖公を祭祀してきたのだろうか。彼らが祀る厖公は、それを祭祀する集団の規模によって、3つのタイプに分けることができる。まず1つめが、「個人厖^{ゴランアン}」と呼ばれるものである。連家船漁民の船にはたいていの場合、甲板の下の船艙部分に、1～3体、多い場合には5体もの厖公の神像と香炉が安置されていたという。厖公の神像が手に入らない場合、もしくはそもそも神像のない厖公を祭祀する場合、簡易的につくられた香炉のみで代用することもあったが、彼らは家族で暮らす船1艘ごとに、こうしたかたちで何らかの厖公を祀る場を設けていた。家族は、朝起床すると厖公のために沸かしたてのお

湯を供え、朝晩の2回線香をあげることを欠かさない。また、毎月旧暦の1日と15日になると、線香のほかにも「寿金（写真3～5を参照）」²¹⁾と呼ばれる金紙を400枚燃やし、厩公に捧げる黄金としたり、2日と16日には多くのおかずを作って、厩公やその家臣たち²²⁾に食べてもらい、自分たちの豊漁と庇護を願ったりする。さらに、それぞれの厩公の誕生日など節目の日になると、線香や金紙を燃やし、おかずを供えるほか、「亀粿」^{グーグイ}と呼ばれる餅の一種を12個用意して、厩公に捧げることもする（写真6を参照）。こうして、生活をともにする各家族が自分たちの船（陸地に定住するための住居を手に入れた後は、家屋）のなかで特定の場所を設け、毎日祭祀する厩公が、個人厩と呼ばれるものである。

2つめのタイプは、「角頭厩」^{ガツタウ・アン}である。先にも述べたとおり、各漁船幫は、たとえば張・欧・黄姓の連家船漁民が所属するなど、複数の同姓グループが集まって形づくられることが多かった。また、同じ張姓を名乗る人々であっても、「わたしたちは、〇〇村から出てきた張姓である」、「わたしたちは、△△村からでてきた張姓である」というように、異なる村の出身であるとされたり、異なる祖先をもつと考えられたりする場合があった。こうした場合、同じ漁船幫に所属する同姓であり、なおかつ祖先も同じくすると考えられている1つずつの集団は、成員同士まとまって、1種類もしくは何種類かの厩公を共同で祭祀することがあった。ここで祭祀の対象とされる厩公が、角頭厩と呼ばれたのである。

残るもう1つのタイプが、「幫頭厩」^{バンタウ・アン}と呼ばれる厩公である。同姓・異姓にかかわらず、また祖先を同じくするかどうかにかかわらず、1つの漁船幫に所属する連家船漁民の人々は、共同で厩公を祭祀する場合があった。こうした厩公が、幫頭厩と呼ばれている。

個人厩は、上述のとおり、各家族が神像をもち、それぞれの船のなかに祭壇ともいえる場所を設けて、毎日祭祀を欠かさない。一方、角頭厩や幫頭厩のような、いくつもの家族が共同で祭祀をおこなう厩公の場合、1種類の厩公につき、神像は各集団に1つだけあるということになる。厩公の神像や香炉は、各集団のメンバーのうち選ばれた家族の船に安置され、毎日の祭祀や月々の祭祀は、その家族によっておこなわれる。つまり、角頭厩や幫頭厩の祭祀を任された家族は、自分の家族が祀っている個人厩とともに、毎日これらの厩公を拝むのである。そして、毎年、厩公の誕生日になると、角頭厩の場合は、祖先を同じくする同姓の親族たちが、また幫頭厩の場合は漁船幫のメンバーが、その神像が安置されている船に集まって、道士などを呼んで盛大に祭祀をおこなう（写真7を参照）。祭祀が終わると、各家庭から1人ずつがでてきて、くじ引きをし、くじに当たった家族が、厩公の神像を自分たちの船に連れて帰り、それからの1年間、日常的な祭祀の責任をもつことになる。連家船漁民たちは、こうして共同で祭祀する厩公の神像を自分の船に安置し、祭祀することを非常に心待ちにしており、くじに当たると、ごちそうや酒を皆にふるまって喜ぶ様子が、現在でもよくみられる²³⁾。

ところで、連家船漁民たちのあいだには、「一条連家船 一座神仙廟（一艘の連家船は、すなわち一つの廟宇である）」という言葉がある。これは、連家船漁民たちは、家族で暮らす船一艘ごとに厩公の神像を安置するほど、厚い信仰心をもつのだ、ということを表す言葉である。そ

の一方で、わたしには、この語が、彼らが一艘一艘の船ごとにしか厩公を祭祀する場所をもたず、連家船漁民全体で共通の厩公を安置する廟宇を所有し得なかったことを意味するようにも思われる。実際、連家船漁民たちは伝統的に陸地に土地を所有しておらず、厩公を安置するための廟宇を建立することもなかった。また、水上に厩公を安置することに特化したような船を用意し、祭祀のたびにここへ集合して廟宇の代わりとすることもなかったという。したがって、連家船漁民の人々は、上述したように、複数の家族でともに祀る角頭厩や幫頭厩などについて、年に1度のくじ引きで責任者を決め、日常的な祭祀はもち回りで各家庭に任されるという方法をとるほかなかった。

また、個人厩・角頭厩・幫頭厩という区別からもわかるように、伝統的に、連家船漁民たちが共同で厩公を祭祀する最大の単位は、各漁船幫であり、いくつもの漁船幫が合同で共通の厩公を祀るということはなかった。このことを理解するためには、連家船漁民の人々が自らをどのような人間関係のなかに位置づけてきたか、その所属意識を明らかにする必要があるだろう。先に述べたS漁業社区成立までの歴史をみてもわかるように、連家船漁民たちが1つの自治組織としてまとまるようになってから、まだ60年ほどの歴史しかない。60年の歴史のなかにも、作業をするときにはそれぞれの漁場にわかれ、また休漁期などに停泊するときであっても各漁船幫がそれぞれの拠点にわかれて生活していた期間があったことを考えると、連家船漁民の人々がいくつもの漁船幫から成るこの自治組織の成員であるという意識をもちはじめたのは、定住政策が本格的に開始され、家をもたぬ人々も続々と現在のS漁業社区を流れる河へ集まりはじめた時期以後のことだろう。実際、現在40代以上の人ならば、たとえ生まれたときすでに両親は現在のS漁業社区のあたりに船を泊めて暮らしていたという人であっても、「わたしは石美漁船幫だから」とか、「おれは、洲頭の〇〇村から出ているんだ」というように、自分の出自をそれぞれの漁船幫と結びつけて答えることができる。こうしてみると、厩公を共同で祀る集団の最大の単位である漁船幫は、連家船漁民の人々が自らを位置づけて考えることのできる集団のうち、もっとも大きな単位ともなっていたことがわかる。

(2) S漁業社区全体を庇護する神明の登場

こうして、連家船漁民の人々は、長らくいくつかの漁船幫が共同で祭祀する厩公をもたないままであった。この状態は、中華人民共和国の成立後、彼らが独立した自治組織である水上鄉人民政府を立ちあげた後も長らくつづいていた。定住のための土地を得てからも、長らくのあいだ、S漁業社区の人々は、共同で厩公を祀るための廟宇を建てることはなかった。自分たちの家屋を準備するのが手いっぱい、厩公のための大きな廟を建てることにまで気がまわらない、ということだったのかもしれない。また、共産党の中央部が掲げる「破除迷信、解放思想（迷信を打破し、思想を解放しよう）」とのスローガンのもとに、文化大革命の前から神像などの大がかりな焼却処分がおこなわれたこともあって²⁴⁾、新たにS漁業社区全体で共同の厩公を祭祀しようとする動きはみられなかった。

共産党主導のもとで合作化がすすんだ1960年代、それまで櫂をこぐ人力と帆による風力だけに頼って船を操縦していた連家船漁民の人々は、初めて発動機つきの大型帆船を造った。1967年には、15艘の発動機つき漁船が造られ、そのうち10艘には当時S漁業社区に設立された人民公社漁業大隊に所属していた連家船漁民の若い男女を中心とする人々が乗りこみ、九龍江河口を出て、外海へと向かい漁をおこなうことができるまでになったという。その範囲は、金門島附近や福建省中部はもちろん、北は浙江省舟山諸島まで、南は広東省の海域まで及んだ。そして1970年代になると、外海での漁は漁獲量・漁獲高ともに大きく上昇をみせ、当時の人民公社漁業大隊全体の漁獲高のおよそ60%を占めるようになっていた。人民公社漁業大隊では、この外海での発動機つき漁船による漁を中心とし、それをほかの人々がアモイ湾附近や九龍江の内部で漁をしたり、定住根拠地である現在のS漁業社区の地に設立された工場で船の部品を造ったり、船の製造・修理をしたり、また魚網を編んだり、魚網の材料となるポリエチレンの繊維を加工するなどして経済を支えるというかたちをとって、しだいに人民公社全体での生産力を上げていった。

こうした背景のもとで、コミュニティ全体の経済状況が豊かになり、共産党による宗教活動の禁止が緩和する動きをみせはじめた1980年代後半に入ると、当時、外海で作業する漁船の船長を務めていた張姓の男性が中心となり、コミュニティのなかに廟宇を建て、そこでS漁業社区全体の厖公を祭祀しようという動きがではじめたという。このためには多額の資金が必要だったといい、コミュニティの幹部や工場の責任者、また資金の豊富な船の船長などにつけあって、どうにか資金繰りをしたうえで、1990年、S漁業社区のはずれ、河のほとりに廟宇を建てることができた。

この廟は、Z宮と名づけられ、その中には水仙王・媽祖・土地公が主要な3つの厖公として安置されることになった（写真8～11を参照）。同時に、Z宮を管理するために、S漁業社区の年配の男性たちから10人ほどが選ばれて理事会を発足させ、彼らを中心として、廟宇にかかわる物事を決定するような仕組みもつくられた。この理事会を中心としたメンバーたちは、毎月旧暦の1日と15日になるとS漁業社区を代表して廟宇を訪れて、厖公たちに線香や寿金と呼ばれる金紙を燃やして捧げ、S漁業社区の人々の安全と平穏を願う。また、彼らは2日と16日には、廟宇の前で肉や魚、野菜を煮炊きして12種類ほどのおかずやスープを準備し、これを厖公やその家臣たちに供え、その後厖公たちの食べ残したおかずなどを食する。こうして、理事会を中心とする年配の人々はS漁業社区を代表し、この廟宇の厖公を祭祀する責任を負うのである。これらに用いられる資金は、S漁業社区の人々が厖公を拝むためにZ宮を訪れる際に厖公へ捧げる「添油（＝賽銭の意）」や、経済的に余裕のある人々からの寄付金でまかなわれている。また、こうした添油や寄付金から報酬をだすかたちで1組の老夫婦に頼み、朝から夕方までのあいだ廟宇に常駐してもらい、日常的な祭祀と掃除などを担当してもらうという制度をとっている。さらに、厖公のなかでもとりわけ漁業と関係の深い水仙王・媽祖（ともに、水神、海上・航海の厖公であるといわれる）の誕生日になると、毎年、S漁業社区の人々がZ宮に集まり、お金をだしあって盛

大な儀礼がおこなわれる。

こうして、連家船漁民の人々は1990年になってはじめて、漁船幫の成員という範囲を超える規模のコミュニティ全体で共通の厩公をもち、それらを安置し祭祀するために特別に設けられた廟宇という場所を所有することになったといえる。そこで祭祀の主な対象として選ばれた水仙王と媽祖は、伝統的に連家船漁民たちの多くが自分の船の上で個人厩として、また角頭厩・幫頭厩として祀ってきた厩公であり、またその性格もともに水や海・航海にかかわる厩公であるという点で、S漁業社区の人々とも関係が深いものとみることができる。その一方で、より興味深いのは、もう1つの主神として選ばれた土地公である。土地公は、福建省南部のさまざまな廟宇では比較的頻繁に主神の1つとして安置される神明であり、人々も家屋のなかに安置して祭祀することが多い。しかし、この土地公はその名のとおり土地を守る厩公であり、連家船漁民の人々は船に住み、そこで生活していたころは、この厩公を祭祀する習慣がなかったという。現在でも、陸上に定住する家をもたないS漁業社区の人々が自分の漁船に祭壇を構えるとき、土地公を祀ることはほとんどないといってよい。しかし、連家船漁民たちは陸上に土地を得て住居を手に入れた後、近隣の農村に住む人々と同じように、家屋のなかで土地公を祀りはじめたのである。S漁業社区の人々がZ宮を建立した際、自分たちを庇護する厩公として、航海の安全を司る水仙王や媽祖と、また陸地での生活の平穩を司る土地公という、2つの異なる性格の厩公を選択したことは、彼らのあいだで定住の基礎となる土地や家を所有する生活が定着してきたことを象徴するものであるともいえる。

(3) 端午節におこなわれる儀礼

Z宮では、毎年水仙王と媽祖の誕生日になると、S漁業社区の人々が集まり、お金をだしあって盛大な儀礼をおこなうと先に述べた。彼らの言い方では、「水仙王は年に2回の誕生日がある」ということで、旧暦5月5日と10月10日、また媽祖の場合は旧暦3月23日が誕生日であるとされる。このうち、水仙王の誕生日のうちの1つである旧暦5月5日を中心としておこなわれる一連の儀礼は、ほかの2つの誕生日とは異なる意味あいをもっている。後者の2つは、単純に水仙王と媽祖の誕生日を盛大に祝うとの意味づけがなされるが、前者のほうには、大きく2つの意味づけがなされる。1つは、水仙王の誕生日が端午節と重なることから、「中国の愛国詩人である屈原をしのぶ」というもの。もう1つは、「河や海などの水上で労働するS漁業社区の人々すべてのために、1年間の豊漁と安全とを祈願する」というものである。これは、S漁業社区に所属する人々の多くが現在でも漁や運搬作業、川底の砂を採る作業など水上での仕事に従事しており、それらの作業が陸地での作業と比較してきわめて高い危険性をもつことなどからくるものであると考えられる。そして、S漁業社区の人々にとっては、前者よりも後者のほうの意味あいがより強く意識されているようでもある。

ここからは、S漁業社区において、旧暦4月29日から5月6日にかけての端午節期間におこなわれる儀礼を主要な8つの部分に分けて取りあげ、ごく簡単に説明しながら、そこから読みとれる事

柄について述べていきたい。

①龍船をきれいにし、龍船を水に入れる（旧暦4月29日午前）

S漁業社区は、現在2艘の「龍船」を所有している。ともに、ふだんはコミュニティ内を流れる九龍江の支流のほとりにある倉庫に格納されており、この端午節の期間だけ人目にさらされるのである。この2艘の龍船は、立体的な龍の頭部はついていないものの、舳先の両側に龍の眼が描かれた、きわめてシンプルな木造の長細い船で、1艘に40～50人が乗ることができる。旧暦4月29日の午前中になると、かつての連家船漁民で、壮年期には船大工もしていたという老人が龍船の倉庫までやってきて、龍船を清める儀礼をおこなう。開始の時間は年によって異なるが、注意しなければならないのは、必ず満ち潮になりはじめる時間を選ばなければならない点であるという。この老人は、小さな香炉のなかに、赤い香を粉末状にしたものを敷き、その上に元宝のかたちをした香を入れたもの（こうして準備された香炉を指して、「^{ジンロー}浄炉」と呼んでいる。浄炉については、写真12を参照）を手にして、倉庫にしまわれたままの2艘の龍船のまわりをそれぞれ1周する。これで、龍船を清めることができるという。さらに、2艘それぞれについている龍の眼の下に、紅い布を3枚ずつ、また、龍船の舳先にも三角形の赤い布を1枚、釘で打ちつけていく。このとき、釘の頭には厝公にささげる際に用いる紙銭の一種がつけられており、布の紅色がもつ縁起のよさとともに、ここでも龍船をより清いものにする働きがあると考えられている（写真13を参照）。このとき、同時に倉庫の前で、普段この倉庫を守っているとされる土地公に供物をささげて線香をあげ、また紙銭を燃やして祭祀する。この老人によれば、龍船が倉庫に保管されているあいだは、この土地を守る土地公によって管理されているのであり、その土地公の許可なしに龍船を勝手にもちだすことはできないのだという。その後、S漁業社区のなかで泳ぎに自信のある青壮年の男性たちがこの倉庫に集まり、老人たちの指揮の下で龍船をかつぎだし、倉庫の前を流れる小さな河のなかに入れる。

先に、龍船を清める儀礼について述べたが、この儀礼を経た後、龍船には「清氣（＝清いという意）」な状態の者しか手を触れてはならず、「^{タイゴ}癩疴」あるいは「^{ボーチンキー}無清氣」の状態にある者は龍船に乗ることも、触れることも許されないことになる。では、この癩疴・無清氣とはどのような状態を指すのだろうか。いずれも閩南語で、汚らしいとか、穢らわしいといった意味あいをもつ言葉である。この文脈では、主に次の人々が癩疴・無清氣の状態に当たるとして龍船やその櫓への接触が禁止される。

第1に、女性である。連家船漁民の人々は、もともと家族で漁船に住み、漁をしていたことから、一般的な漁船に関しては、現在でもとりわけ女性を排除するようなことはない。しかし、龍船やこれに関わる儀礼に関しては、「女は毎月血を流すから」といって、女性一般を癩疴・無清氣の状態にあるものとみなしている。女性の排除は、龍船への接触にとどまらない。たとえば、龍船が河をとおり、女性が橋の上に立って龍船を見学することさえも禁止されるのである。これは、「神聖な龍船が、癩疴な女の下、ましては股の下をくぐりぬけるなんて、とんでも

ないことだ」と考えられているためである。

第2に、たとえ男性であっても、両親や祖父母、またオジ・オバなど比較的近い親族が亡くなって1年が経過しない者は、癪痾・無清気の状態にあるとみなされる。これは、死という出来事そのものが癪痾・無清気の状態を引き起こし、それが死者の葬儀や祭祀に参加することなどによって近縁の親族にまで広がり、さらにその親族が龍船に触れることによって、その癪痾・無清気な状態がS漁業社区全体の豊漁や安全に影響を及ぼすと考えられているためである。

第3に、妻が女子を出産してから1ヶ月が経過しない男性も、癪痾・無清気の状態であるといわれる。これは、妻が男子を出産したばかりの男性が非常に「めでたいこと」とされ、龍船の漕ぎ手として好まれることとまったく対照的である。したがって、ここで癪痾・無清気の状態を生み出すと考えられているのは、妻の出産という行為そのものではなく、女性の新生児が生まれてくるという出来事のほうであるといえよう。

②過火（旧暦5月1日午前）

旧暦5月1日の早朝になると、Z宮には年配の男性たち10人ほどが集まって、厩公の祭祀をはじめ。彼らは理事会とは別に存在しており、「厩公に精通する者」とみなされている²⁵⁾。厩公に精通する老人たちは、廟宇の外に設けられた「天公炉（天公、すなわち道教において最高神に位置づけられる玉皇大帝を祀るための香炉）」をとり囲むように座り、役割分担をして太鼓やドラ、拍子木などをたたきながら、節をつけて経を唱え、廟宇のなかに安置された厩公たちを祀る（写真14を参照）。これと同時に、老人たちは廟宇の外の地面の上に、植木鉢ほどの大きさの素焼きの炉に木炭を何個も入れて点火したものを用意する。そして、老人のなかでも特に厩公の力を感じる能力があると考えられている男性が、息を吹きかけた黄色のお札を炉に入れたり、生米の粒や水を口で炉の上に吹きかけたりしながら、炉の火を徐々に大きくしていく（写真15を参照）。この炉は、特別な力をもつものとされ、こうした老人たちを除いて、どんな人も直接手を触れてはならないという。

潮が満ちはじめのを待って、S漁業社区の住民のうち、龍船の漕ぎ手となる100名前後の青壮年たちが龍船用の櫂を手にZ宮に集まってくる。青年たち厩公に精通した老人たちの指示で廟宇のなかに安置されている厩公の神像を輿に座らせて廟宇の外に運びだし、ここで老人たちは厩公たちの輿に線香を立てたり、厩公の身体に香水を吹きかけたりして外出の準備を整える。準備がすべて整うと、太鼓や拍子木を手にした老人たちを先頭に、龍船の指揮をとる男性がドラをもってこれにつづき、その後ろから輿に座らせた水仙王と媽祖の神像を背負った青年たち、さらに櫂をもった青壮年たちが順番に上述の炉を跨ぐようにして飛び越え、歩いて龍船の浮かぶ河まで向かう。こうして炉の火を跨ぐことを、「^{グイホエ}過火」と呼んでおり、龍船に乗りこむ男性たちたちは、必ず廟宇の前で履物を脱いでこの炉を跨がなければならないとされている（写真16を参照）。先に、癪痾・無清気の状態にない男性のみ龍船に触れることができると述べたが、この基準を満たした男性たちであっても、この厩公に精通した老人たちによって準備された炉の火

を越えてはじめて浄化され、真の清気という状態になったとみなされるのである。

③請江

過火を終えた老人と青壮年たちは、2艘の龍船に水仙王と媽祖の神像をそれぞれ座らせる。また、各龍船には豚の頭・アヒル1羽・ニワトリ1羽・生魚1尾・インスタントラーメン1袋、また「香餅」と呼ばれるせんべいのようなものが準備され、それぞれの厩公に供えるための供物とする。龍船の船尾には壮年が「龍船旗」と呼ばれる幟をもって座る。さらに、老人たちが2艘の龍船の舳先にわかれて線香や紙銭をもって座り、厩公を囲むようにして青壮年たちが船に座る。龍船を漕ぎだす前に、龍船の上に乗る人々すべてが浄炉と呼ばれる小さな炉を頭の上でまわし、念には念を入れて自分の身体を清気な状態にする。

そして潮が満ちはじめころ、龍船の中央に立つ1人の壮年がたたくドラの音にあわせて、龍船を九龍江の本流まで漕ぎだす²⁶⁾。これには、この日の前日、龍船を進水させた際と同じように、必ず満潮になりはじめる時間帯を選ばなければならないといい、あらかじめ、厩公に精通した老人たちが廟宇で「尚杯」と呼ばれる紅色の空豆形をした道具を用いて厩公に伺いを立て、龍船の出発時間を決定しておくのである。その後、龍船に乗りこんだ男性たちは、九龍江を下流にむかって漕ぎすすめる。この間、龍船の舳先に座った老人たちはひっきりなしに線香に火をつけ、寿金を河にふりまいて厩公を拝みつつける（写真17を参照）。

龍船は、九龍江河口のアモイ島附近に位置する鷄嶼島と呼ばれる島が望める地点までですんだところで、いったん停止する。船の上の老人たちは、ここで新たに線香に火をつけ、船の外に向かって拝みはじめる。ここで祭祀の対象とされるのは、ふだんは廟宇ではなく外海に存在しているとされる厩公、^{ガンオン}「江王」である。その後、龍船に積んできた花瓶のなかに、河の水を入れて龍船の上に載せ、そのままS漁業社区まで戻る。すなわち、S漁業社区の厩公を代表する水仙王と媽祖が外海附近まで出向き、江王に請うて龍船の上、ひいてはS漁業社区のなかに来てもらうのである。こうした行為は^{チンガン}「請江」と呼ばれ、江王はこのときから旧暦5月5日までのあいだ、S漁業社区のなかにとどまると考えられているようである。

④洗江

請江を終えた2艘の龍船はS漁業社区内を流れる小さな河に戻り、ちょうど満潮になって水かさが増えるころになると、この河のなかを3往復する（写真18を参照）。河の兩岸に停泊している小型の漁船には、船の持ち主のみならずS漁業社区の人々が集まり、また両側に建てられた集合住宅群や橋の上でも人々が群れをなしてこの様子を見守る。このとき、龍船を見ている者は寿金や火のついた爆竹を龍船にむかって投げつける。これは、廟宇や外海を離れ、自分たちのコミュニティのなかを流れる小さな河までわざわざ訪れてくれた水仙王や媽祖、江王を人々が歓迎し、水上で仕事に就くS漁業社区の住民たちが1年間安全に作業できるよう、また漁をする住民たちが豊漁を得られるように、と願う意味がこめられている。このあいだじゅう、河は爆

竹のはじけるパンパンという音と、モクモクあがる煙とで、まるで戦争のような情景をかもしだす。

こうして龍船が河を3往復することは、「洗江^{ヒヤザン}」と呼ばれる。これは、その名のとおり、河を洗い清めることを意味している。S漁業社区の人々がこうして洗江をはじめることになったのには、あるきっかけがあった。現在でこそ小さく縮小されてしまったこの河も、1980年代までは、規模の大きな漁港として機能していた（写真19を参照）。1960年代ごろから続々とS漁業社区の土地に移動してきた連家船漁民たちは、休漁期や年末などになるとこの漁港へ戻ってきて、大小の漁船をここに停泊させていた。ところが、1970～1980年代にかけて、この漁港では不慮の事故が多発したという。たとえば、小さな子どもが狭い船の上で遊んでいる最中に足を踏み外して落水し、死亡したり、また大人が漁船の上で洗濯をしている最中に誤って水に落ち、そのまま亡くなったりするということがたびたび起こったのである。これをみて、人々は「この漁港には『水鬼^{スイグイ}』がいるにちがいない。この水鬼が悪さをして、生きている人間を水のなかに引っぱりこもうとするから、事故が起こる。だから、この河を清気な状態にすることが必要だ。これは、人間の力ではとてもできないことだから、ぜひとも厩公の力を借りようじゃないか」ということになったのである。こうして、Z宮が建立された後に、通常はZ宮のなかに安置されている水仙王や媽祖、また外海にいる江王の力を借り、彼らを龍船に乗せてこの漁港を往復することでここを清気な状態に保たせようとする試みがはじまった。これと同時に、厩公にS漁業社区に所属する人々、とりわけ水上での仕事に従事する人々が1年を事故なく安全に過ごせるよう、また漁をする人々が豊漁であるようにとの願いもこめられることになったのである。

⑤厩公による巡社（旧暦5月1日午後）

洗江を終えた旧暦5月1日の午後、S漁業社区の青壮年たちはまたZ宮に集まり、廟のなかに安置されている土地公を除くすべての厩公を外に連れだす。その主なものは、水仙王と媽祖、そしてふだんは廟のなかで土地公の傍らに鎮座^{ホーガ}している、「虎爺^{フゴンギョー}」と呼ばれる虎の形をした厩公である。これらの厩公の神像は、それぞれ「厩公旗」と呼ばれる色とりどりの旗がつけられた輿に乗せられる。また、江王をS漁業社区のなかに迎え入れた後、江王・水仙王・媽祖の3つの厩公を模ったとされる紙製の小さな神像がZ宮のなかに安置されるが、この3つの紙製の神像ともに1つの輿に安置される。そして、4つの輿や大きな厩公旗をもつ男性の老人や青壮年たちは、午前と同じようにZ宮の前で過火をし、自らの身体を清気な状態にした後で、S漁業社区のほうにむかって歩きだす。こうして彼らは、ゆっくりとS漁業社区の土地のなかをくまなく歩きつづけるのである。

道沿いの家の戸口までくると、厩公の輿をかついだ男たちはいっせいに輿を前後左右に揺らし、開け放たれたドアにおつけるようなしぐさを何度もくりかえす（写真20を参照）。これは、厩公がS漁業社区の各家庭に訪れることを意味している。このとき、厩公を迎える側の人々は戸口の外に小さな机をだしておき、その上に自分の家庭で祀っている厩公の香炉や「肉粽^{バクザン}」

や「鹹仔粽^{ギョアザン}」と呼ばれるちまき²⁸⁾、果物やお菓子などを並べて厝公の来訪を喜んで迎えるのである。また、その家の者も附近の人々も、寿金を厝公にむけてふりまき、火のついた爆竹を厝公におつけるようにして鳴らし、厝公の到来を喜ぶ。これもまた、厝公をS漁業社区のなか、もしくは各家庭に招き入れるのに必要不可欠なことのようで、だれもかれもが爆竹を鳴らし、寿金をふりまくので、厝公が去った後の道は、爆竹のくずで真っ赤に染まるほどである²⁹⁾。そして、厝公に来てもらった家庭では、最後、厝公の興をかつぐ青年たちに「紅包^{アンバオ} (=小さな紅い紙に包んだお金)」をわたし、厝公への謝礼とする。また、厝公をかついだ男たちは、S漁業社区のなかでも大きめの通りになると、いっせいに厝公を激しく前後左右に揺らしながら通りの端から端まで走りぬけ、通りを3往復する。このときにも、人々は爆竹に火をつけ、寿金とともに厝公たちに投げつける行為をつづける。こうして、厝公がS漁業社区の土地をくまなくまわることは、「巡社^{スンシア}」と呼ばれ、厝公がふだんいる廟宇を離れ、年に一度村のなかを巡回して人々の生活を見るのだとされる。

厝公の神像による巡社と同時に、厝公に精通した老人のうち、どの儀礼においてもとりわけ中心的な役割を果たす1人の老人が、裸に腹掛けをし、白い巻きスカートのようなものをはいてS漁業社区の居住区に現れる。彼は、日ごろは妻とともに船で九龍江の内部へでかけ、魚を捕るごく普通の老人であるが、必要なときには厝公を自らの身体に降ろすことができる。彼のような人は、「跳童^{ディアオダン}³⁰⁾」と呼ばれる。裸に腹掛けをし、白い巻きスカート状の服を身につけると、それは彼が厝公を身体に降ろしたことを意味している。彼は、S漁業社区の住民から特別に要望があると、その家へ赴き、家の入り口から内部へ向かって剣を振りかざす。こうして、家のなかを清気な状態にすることができると考えられているようである。

ところで、S漁業社区において、この厝公による巡社というのは長い歴史をもつものではない。わたしがはじめてS漁業社区の端午節を見ることができたのは、2007年のことであった。そのときすでに、Z宮の厝公たちは旧暦5月1日の午後になるとコミュニティのなかまで繰りだし、巡社をしていたために、わたしはこの巡社はS漁業社区において長らくつづけられてきたことなのだと勘違いしてしまった。ところが、2009年になって老人と話していたときに、こうした厝公による巡社が、2007年になってはじめておこなわれたということがわかったのである。興味深いことに、厝公がS漁業社区を巡社するようになった経緯は、S漁業社区の成立とも密接に関係している。

そもそも、村落の成員によって共同で祀られる神明が、誕生日など特別な日にふだん安置されている廟宇を離れ、人々が暮らす村のなかへと巡回にでかけるということは、少なくとも福建省の南部、閩南地域ではごく普通におこなわれることなのである。こうした厝公による巡社という習慣については、連家船漁民の人々もまだ定住するための土地をもたず、水上の船で生活していたころすでに、自分が停泊する港のある農村などで見て知っていたという。また、彼らは現在のS漁業社区に土地を得て定住生活をはじめてからも、近隣の農村部で、人々が毎年のように厝公を村に連れだすのをたびたび目にしていた。そして、1990年にS漁業社区全体の廟

を建て、厩公を安置するようになってからは、自分たちも厩公を廟宇の外に連れだして、自分たちの住居が集まる地区を巡回させたいと願うようになった。しかし、老人たちによれば、彼らは「そんなこと、とてもじゃないけどできなかった」のだという。なぜならば、1960年前後にこの地で定住生活をはじめてから50年あまりのあいだ、S漁業社区の人々は自分たちの暮らす土地について、近隣の農村からの借りものであるという考えが、頭から離れなかったからだという。実際には、定住生活をはじめた初期の段階では、地方政府が近隣の農村に対し連家船漁民たちに土地を譲渡するよう命じており、このときすでに、土地はS漁業社区の前身だった組織に受け渡されている。また、その後も連家船漁民の人々は政府の援助を受けながら、自ら周辺の土地を購入し、そこに定住するようになっており、制度上、彼らの暮らす土地は彼ら自身のものということになる。それでも、連家船漁民の人々は、気持ちの上では、長らくのあいだ、S漁業社区の土地が自分たちの土地ではないという思いを拭いきれずに生活してきたというのである。それが、やはり厩公に自分たちの生活を見てもらいたいという声が高まり、Z宮の理事会で何度も話し合いがおこなわれた結果、2007年になってはじめて、Z宮の厩公による巡社がおこなわれるようになったのである。こうしてみると、Z宮の厩公によるS漁業社区の居住区での巡回は、定住の開始から50年たった現在、S漁業社区に住む人々が自分たちの暮らす土地を、ようやく自分たちのものとして認識しはじめたことの表れであると理解できるだろう。

こうした意識の変化を考えるうえで助けとなる例がある。先に、現在40代以上の人ならば、「わたしは石美漁船幫だから」とか、「おれは、洲頭の〇〇村から出ているんだ」というように、自分の出自をそれぞれの漁船幫と結びつけて答えることができると述べた。ところが興味深いことに、30代以下になると、「あなたはどこの漁船幫の人？」と尋ねても、「漁船幫ってなあに？」という答えが返ってくることが多い。「あなたのもともとの出身地はどこ？」と尋ねなおすと、「わたしはS漁業社区で生まれたから、たぶんこの人なんでしょう」と返されることもある。10代ともなると、「おじいちゃんやおばあちゃんの出身地なんて知らない」という子もいるほどである。いずれにせよ、自分が何者であるか、という意識の変化を考えるうえで非常に興味深い現象といえる。S漁業社区という土地で生まれてそこに定住し、そこで学校へ通い、S漁業社区の者として近隣地区の友人たちと接し、またS漁業社区の住所が入った身分証をもつということが、こうした所属意識の変化を生む一因として考えられるかもしれない。

⑥歌仔戲（旧暦5月1日夜～6日夜の6晩）

旧暦5月1日の夜から6日の夜までの6晩、S漁業社区内の広場に設けられた臨時の舞台では、漳州市から招いた劇団による「歌仔戲」が上演される。この歌仔劇は「^{クウオアヒー}薙劇」とも呼ばれ、福建省の閩南地方や台湾、また東南アジアの華僑たちのあいだで広がる地方戯曲を指している³¹⁾。劇団員たちは古代の衣服を模した服を身につけ、上演はすべて閩南語でおこなわれる（写真21を参照）。舞台の前には老人をはじめとするたくさんの人が椅子をもって集まり、每晚3～4時間かけて観劇する。この歌仔戲は、意味あいとしては人間に見せるためではなく、厩公たちに見せ

るために上演されるものとされている。閩南地方の多くの村では、廟の前に常設のものとして舞台がそなえつけられ、厝公の誕生日などに劇が上演されるのが一般的なようである。しかし、Z宮はS漁業社区のなかでもはずれの河のほとりに位置しており、十分な土地がないために、コミュニティ内にある広場に舞台を臨時で設置し、そこで上演するほかないということになる。そこで、観客の後ろ側に小さなテントを仮設し、そこにZ宮で祀られる厝公の名前を書いた紅い紙を貼り、用意した机の上に日ごろ廟宇で使われる厝公の香炉や果物などの供物を並べて、厝公が観劇する空間をつくりだす。実際に厝公たちの神像が舞台の前までやってくることはないが、こうして厝公に観劇してもらうという意味が込められるのである。

⑦洗江（旧暦5月5日午前）

旧暦5月5日、すなわち端午節当日の早朝になると、Z宮では厝公に精通した10人ほどの老人たちが中心となり、厝公の祭祀がおこなわれ、1日の早朝と同様に過火のための炉が準備される。1日の早朝と異なるのは、上述した跳童が、ほかの老人たちの奏でる太鼓や拍子木の音と、節をつけた経の声色に合わせてしだいに厝公を身体に降ろしはじめることである。彼は、ほかの老人たちの助けを借りて腹掛けと白いまきスカート状の衣服に着替え、自分の舌を歯で噛んで血をだし、その血を筆にとって、後述する「王船」^{オンズン}と呼ばれる紙製の船の側面などに塗りつけていく。この後、潮が満ちはじめのを待って、厝公の輿や龍船旗、龍船の櫂などを手にした男性たちが炉をまたいで過火をおこない、自らの身体を清気な状態にしてから龍船に向かう。

この日は1日と異なり、10人ほどの老人たちは3艘のエビ曳き船にわかれて座り、水仙王と媽祖、また紙でつくられた水仙王・媽祖・江王もそれぞれわかれてこの3艘のエビ曳き船に乗せられる。こうして厝公を乗せることのできる大きめの漁船は、誰の船が担当するのかを前もって決めておくのだが、「厝公には、ぜひうちの船に乗ってもらいたい」といって、毎年希望者が殺到するため、くじ引きで決定するのだという（写真22を参照）。くじに当たった漁船の船長たちは、当日、焼いた豚足・焼いたアヒル・焼いたニワトリを中心とした供物を準備して厝公たちを迎え入れる。また、100人ほどの青壮年たちは2艘の龍船に乗りこんで九龍江の本流まで漕ぎだしていく³²⁾。この龍船の舳先には、水で洗った生米を箆に入れたものが置かれ、その上に線香がたてられる。

厝公を乗せた漁船と龍船は、九龍江本流に泊められたS漁業社区の人々が所有する大型漁船や小型漁船のあいだをくまなくまわる。漁船の持ち主たちは、船の上から爆竹に火をつけ、寿金とともに厝公や龍船にむかって投げつける（写真23を参照）。これも、ふだん廟宇の中や外海にいる厝公たちが、そこを離れてわざわざ自分たちの漁船へとやって来てくれたことに対する謝意を示しているという。S漁業社区内の河でおこなわれる洗江と同じように、これには厝公の力を借りて港を清気な状態にし、1年のあいだ漁船が安全に作業できるよう、また豊漁であるようにと願う意味がこめられている。この願いは切実で、厝公を乗せた船や龍船が一度もまわってこない漁船の船長などは、携帯電話で連絡をとりあい、「早く自分のところにもまわってきてく

れ！」と大声で抗議するほどである。

その後、厩公たちは3艘の小型の漁船に乗り換え、2艘の龍船とともにS漁業社区内を流れる河へと入っていく。潮が満ちると、厩公を乗せた船と龍船は順に河のなかを3往復する。1日と同様、これは洗江と呼ばれ、人々は点火した爆竹や寿金を準備して、それを厩公や龍船の漕ぎ手たちに投げつけて彼らを迎え入れる。

⑧送王船（旧暦5月5日午後）

ところで、S漁業社区の人々は、3年に1回、この端午節の期間に王船と呼ばれる船を準備する。これは、紙や竹を用いて作られた紙製の船で、長さ4mほど、幅はもっとも大きな部分で1m80cmほどの大きさの船で、舳先には水神として知られる龍王の顔が描かれ、龍王の玉や刀がつけられている。老人たちは、この王船はかつての運搬船と似た形であるという。これは、S漁業社区の附近で葬儀用品の販売を生業としている職人に頼んで作ってもらう。彼らは、日ごろから、葬儀用品として紙製の家屋などを作っており、非常に優れた技術をもつためである。彼らの作った王船の上には、操縦室や帆や錨、舵といったもののほかに、水桶や船の上に入ってきた水を船の外へだすときに用いる道具、また船から岸へ上がるときに掛け渡して使う板といった生活必需品が備えつけられている。また、王船の上には1人の船長と18人ほどの船員たちが乗り、それぞれ櫓を手で方向確認をしたり、錨をおろしたり、旗をもったりして作業をしている姿などが模されている。さらに、端午節の期間になると、厩公に線香をあげるためにZ宮へやって来る人々は、王船に載せるための物資を準備してもってくる。それは、紅い布でこしらえた小さな袋に詰めた生米・12本の小さな木の枝を集めてこしらえた柴・寿金や「銀仔^{ギンア}」と呼ばれる紙銭の3種類である。

王船には、旧暦5月1日の朝に外海から迎え入れてきた江王を乗せると考えられているようで、5月5日の午後、Z宮の前には王船が運びこまれ、その前には、香炉のほかに、江王に供えるものとして、豚の頭・アヒル1羽・ニワトリ1羽・生魚1尾・インスタントラーメンや果物などが並べられる。潮が退きはじめるころにあわせて、厩公に精通した老人たちを中心とした男性たちが、王船の前に集まり、王船に向かって線香をあげる。2009年は、ちょうどこの王船が準備される年に当たり、わたしもこの現場に居合わせることができた。このとき、旧暦4月29日からここまでの端午節期間中、厩公の祭祀には直接的に関わってくるもののなかったS漁業社区の共産党幹部や、自治組織の幹部が王船の前へやってきて、「S漁業社区の住民たちがこれからの1年間、安全で過ごせますように」といって線香をあげたのが、非常に印象的であった。ここにも、端午節期間にZ宮を中心としておこなわれる厩公の祭祀儀礼が、S漁業社区全体を代表するような性格をもつことが如実に表れていると理解できるだろう。

潮が退きはじめると、男性の青壮年たちが王船をかつぎ、九龍江本流の岸边へと運ぶ（写真24を参照）。このとき、Z宮から水仙王や媽祖、虎爺といった厩公の神像も輿に乗せられるかたちで岸边へと向かう。次に、男性たちは岸边へとおろされた王船の上に、S漁業社区の人々がもつ

てきた3種類の物資や、瓶に入れた油・壺に入ったキュウリの漬物・マッチ数箱などを載せる。これらの供物とともに、紙で作られた水仙王・媽祖・江王の3つの庇公も、あわせて乗せられる。庇公に精通した老人たちが線香を手にとり、江王に「外海へお帰りください」と唱えると、男性たちは王船に火をつけ、王船は一気に燃やされる（写真25を参照）。この様子を、水仙王や媽祖・虎爺の神像たちは青年たちのかついだ輿に座ったまま、見守るのである。これを、「送王船^{サンオウセン}」と呼んでいる。この送王船に潮の退く時間が選ばれるのは、1日に江王を迎える請江が潮の満ちるときでなければならないとされるのと対照的である。こうして、江王を外海へ帰すと、次の日の夜まで演じられる歌仔戲を残して、端午節の儀礼はすべて終わりである。

4. 端午節の儀礼からみるS漁業社区の人々のもつ所属意識

ここまで、S漁業社区が成立するまでの過程についてその歴史的背景を概観し、また2009年旧暦4月29日から5月5日までにおこなわれた端午節の儀礼の主要な部分について、ごく簡単な説明をしてきた。これらのきわめて部分的な記述から読みとれるのは、九龍江河口の各港湾に広がりながら船を家として生活してきた連家船漁民の人々が、陸上に土地と住居を得るなかで、S漁業社区というコミュニティに対する帰属意識を少しずつではあるが、確実に芽生えさせてきているということである。

船を漁や運搬の道具とし、また一方で生活の場とし、家族で九龍江河口を移動する暮らしをしてきた連家船漁民の人々は、自らの祖先は元来、九龍江沿岸部の農村で農業に従事する農民であったという考えをもっていた。また、彼らが拠点とする港湾はこうした沿岸部の農村に所属しており、船を停泊させる連家船漁民たちのほとんどが、具体的な事実関係は不明ながらも、各農村の農民たちと血縁関係をもつと認識していた。こうした農村と連家船漁民の人々との関係は、彼らがS漁業社区に土地と家屋、停泊の拠点を手に入れて、農村にあるかつての根拠地となった港湾へはほとんど立ち寄りなくなった現在でも確認することができる。たとえば、九龍江河口に位置するN農村の港を拠点としていた黄姓の連家船漁民たちの一部は、現在でも毎年冬至などになるとN農村へ出かけていき、自らの祖先が祀られている黄姓の「祖厝^{ゾーフ}³³⁾」で祖先たちの位牌に線香をあげる。しかし、この祖厝のなかに、直接黄姓の連家船漁民たちにつながるものが確認できる死者の位牌は安置されていない。N農村の黄姓の人々がもつという族譜のなかにも、連家船漁民たちとつながる詳細な記載はないという。それでもN農村の農民たちは、S漁業社区から毎年やってくる連家船漁民たちを、祖先を同じくする者として迎え入れるのである。

こうして、各港湾には祖先を同じくし、血縁関係で結ばれた（と考えられている）漁民たちが船を連ねて停泊しており、長い月日のなかで、同じ港湾を停泊拠点とする人々や近隣の港湾で停泊する人々が集まって形づくられるようになったのが、漁船幫と呼ばれる自助的なグループである。それぞれの漁船幫に所属するのは、1つの姓から成る連家船漁民とは限らず、複数の同姓グループである場合が多かった。そして、それぞれの漁船幫は、連家船漁民の人々が自らを位置づけて考えることのできる集団のうち、もっとも大きな単位となっていた。このことは、

個人厖・角頭厖・幫頭厖という区別からもわかるように、伝統的に、連家船漁民たちが共同で厖公を祭祀する最大の単位は、各漁船幫であり、いくつもの漁船幫が合同で共通の厖公を祀るということはなかったということにも如実に表れている。

中華人民共和国成立後の1949年から1950年にかけて、連家船漁民たちは管轄されていた農村内の組織を離れ、いくつもの漁船幫が集合して、当時の漳州市内に2つの水上郷人民政府を立ちあげた。こうして連家船漁民の人々は農村部からの独立を果たし、それまでの漁船幫よりも大きな自治組織のなかに自らを位置づけることになった。しかし、このころになっても人々は依然として陸地には田畑や居住のための土地をもたず、漁船や運搬船で移動生活をつづけながら人民政府に所属していた。その後、1959年の台風襲来による大災害をきっかけとして、1960年代から九龍江河口附近の農村から土地の一部をもらい受け、そこを定住と停泊の基盤とするようになった。厖公の祭祀という点に目を向けると、連家船漁民の人々は現在のS漁業社区の所在地に定住可能な住居を獲得し、休漁期になるとここへ船を停泊するようになった後も、長らくのあいだ、いくつもの漁船幫が合同で共通の厖公を祀るような動きをみせることはなかった。

その後1990年になって、連家船漁民の人々はZ宮と呼ばれる廟宇を建立し、はじめてS漁業社区の人々全体、すなわち漁船幫という範囲を超えた人々が共同で厖公を祭祀する施設と制度を整えるようになった。この背景としては、1960年代に現在のS漁業社区に相当する人民公社漁業大隊に所属していた連家船漁民たちが、ともに大型の漁船に乗りこんで外海へ赴き漁をし、それを九龍江の河口附近で漁をおこなう人々や、陸地に設立された工場などで働く人々が支えるかたちで、大隊全体の生活を向上させてきたという状況を考えることができる。さらに、Z宮で祭祀する主神として、水上や航海の安全を司る水仙王・媽祖とともに、それまで彼らが船のなかで祭祀することのなかった土地の守護神、土地公を加えたということからは、連家船漁民たちのあいだで定住の基礎となる土地や家を所有する生活が定着してきたことがうかがえる。

その一方で、S漁業社区の人々は、本格的な定住生活をはじめてから長らくのあいだ、自分たちの暮らす土地について、近隣の農村からの借りものであるという考えが頭から離れなかったのだという。そのために、Z宮の厖公をS漁業社区内の居住区にまで連れだし、巡回してもらって人々の生活を見学してもらうことを避けてきた。それが、2007年になってはじめて、端午節期間にZ宮の厖公による巡社がおこなわれるようになっていく。このことから、定住の開始から50年たった現在、S漁業社区に住む人々が自分たちの暮らす土地を、ようやく自分たちのものとして認識しはじめたことが表れていると理解できるだろう。

これまでみてきたように、端午節期間におこなわれる儀礼のすべては、S漁業社区で多くの人々が従事する漁や漁獲物の運搬、河での土砂の掘り起こし作業など、水上での仕事において、1年間何事もなく安全に作業をおこなうことができるよう、またその収獲が豊かなものであるよう厖公に願っておこなわれる。儀礼のなかでは、癡癡・無清氣の状態にある人々が注意深く排除されるが、これも厖公の怒りを買ってS漁業社区の人々全体の今後1年間の安全と豊漁に支障をきたす可能性を考えてのことである。こうしたことから、S漁業社区の人々が、自らをある

漁船幫の一員であるという枠を超えて、S漁業社区の成員であるという意識をもつようになったということのみてとれるだろう。この50年ほどのあいだに、連家船漁民の人々やその子どもたちが、S漁業社区という土地に居住する家屋を得て、そこでS漁業社区に建てられた自分たちの学校へ通い、またS漁業社区の住所が入った身分証をもち、S漁業社区の者として近隣地区の友人たちと接してきたということが、こうした意識の変化を生みだした一因として考えられるかもしれない。

しかし、このことは、人々がS漁業社区に限定するかたちで所属意識をもっているということを示すわけではない。自分の祖先は〇〇村の出身であるらしい、といってその農村へ出かけていき、自分と直接的につながる祖先の位牌が1つも安置されていない祖厝において、彼らの祖先祭祀に参加するS漁業社区の老人たちにとって、この農村は自らの帰属を考えるうえで基盤の1つとなるはずである。またある人々は、定住生活をするようになった現在でも、角頭庇の誕生日になると、かつて同じ漁船幫に属していた同姓の親族たちとともに家屋や漁船で共同の祭祀を盛大におこなう。これには定住後に生まれたような若者たちもごく自然に参加しており、彼らは自分の父母や祖父母がどんな漁船幫に所属していたのかを知らずとも、そのなかで親族同士の絆を理解し、その関係性のなかに身をおくようになっている。重要なのは、こうしたいくつもある所属意識が、対立するかたちではなく、重層的・同時的なものとして存在しているということである。すなわち、自分は〇〇農村の人々と祖先を同じくしているのだということと、△△漁船幫の××姓の何代目であるということ、またS漁業社区の成員であるという異なる所属意識が、歴史的な時間軸のうえで次から次へと塗り替えられてきたというのではなく、現在を生きる1人の人間のなかに、同時に存在しているととらえることができよう。

5. おわりに

わたし自身がS漁業社区で研究をすることになった経緯やそのことに対する不安、とまどいからはじまり、S漁業社区成立までの歴史的背景について概況を示し、また旧暦4月29日から5月5日までにおこなわれる端午節の儀礼のうち主要な部分について、きわめて簡単な説明をしてきた。そして、これらのごく部分的な記述から、連家船漁民の人々のなかには、少しずつ、段階的にはあるが、自らがS漁業社区というコミュニティに所属する成員であるという意識が芽生えてきたことが読みとれた。さらに、この所属意識は限定的なものとして存在するのではなく、自分は〇〇農村の人々と祖先を同じくしているのだということと、△△漁船幫の××姓の何代目であるということ、またS漁業社区の成員であるという異なる所属意識が、1人の人間のなかに重層的・同時的なものとして存在しているのではないかと結論づけた。

S漁業社区で連家船漁民の人々について研究しようと決心してから3年の月日が経とうとしている現在、わたしの心はまだ迷いでいっぱいである。S漁業社区の人々のことをまだ何も理解できていないという気持ちは、研究をすすめればすすめるほど大きく膨れあがっている。本稿のなかで取りあげた事柄についても、さまざまな点でさらなる調査の必要性を感じており、不完

全さをひしひしと感じている。これらについては、今後の課題として研究をすすめたい。

註

- 1) 羽原は著書のなかで、「漂海民」とは、本来的には(1)土地・建物を陸上に直接所有しない、(2)小舟を住居にして一家族が暮している、(3)海産物を中心とする各種の採取に従い、それを販売もしくは農作物と物々交換しながら、一カ所に長くとどまらず、一定の海域をたえず移動している、という3つの条件をそなえていたと推測する。その一方で、羽原はこの本の出版時点において、この3つの条件にあてはまる人々は、もはや稀にしかみられないと記述している[羽原 1963:2-3]。
- 2) 欧陽 1998 98ページを参照。
- 3) 中国における水上生活者たちをとりまく被差別の歴史については、広東省民族研究所 2001、孟 2004、範 2005、黄 2008、張 2008 などを参照。
- 4) 厳は、自身の論文のなかで、「蜑戸」は各地で「九姓漁戸」「墮民」「伴当」「世仆」「小姓」「丐戸」と呼ばれた人々と同様に、歴史上社会の最下層に位置づけられてきたという。こうした人々に共通するのは、いずれも「賤業」に従事することで暮らしを立てており、戸籍上、士・農・工・商といった「四民」たちとのあいだに明確な区別がつけられていたという点である。厳昌洪は、こうした「賤民」たちの多くは、歴史上のある時点において貶められていた「罪人」と結びつけられることが多いと指摘する。それゆえに、「賤民」とは、1つの時代に特有の産物であるわけではない。ある王朝は以前の王朝が「賤民」と位置づけた人々を解放しうるし、また一方で彼らが「罪人」とみなす人々の一部を新たに「賤民」として貶めうる、というように「賤民」に含まれる人々は時代によって異なりうるものだからである。しかしその一方で、「賤民」に対する差別意識は人々のあいだに根強く残りつづけるものである。たとえば、清朝雍正年間に上記の「賤民」たちを「賤籍」から除籍し、平民と同様「甲戸」に組み込むとの命が相次いで下されたが、彼らの差別的な待遇は依然として変わることなく、平民と同じだけの納税義務が発生しただけにとどまっている[厳 2005]。
- 5) 欧陽 1998 97-99ページを参照。
- 6) 民族識別工作で実施された蜑民の調査については、広東省民族研究所 2001に詳しい。
- 7) 一例として、珠江下流域に暮らす水上居民の身体的特徴を形質人類学の立場から研究した黄らによる論考[黄ら 1985]や、香港における水上居民の社会や文化を分析した可児の論考[可児 1970]などが挙げられる。
- 8) 標準中国語で、「知識人・インテリ」の意。
- 9) 標準中国語・閩南語(福建省の南部で広く用いられる方言。本稿で主な調査対象とする漁村の人々が日常話すのも、この閩南語である)ともに、博士課程の学生をこう呼ぶ。
- 10) 閩南語で、「査某」とは「女、女の人、女の子」という意。
- 11) 福建省漳州市水利水電局編 1998 6ページを参照。

- 12) 中国国内の多くの地域と同様に、現在、S漁業社区の周辺地域では、夫婦がともに外で働いており、経済的には余裕があるものの、家事をおこなう時間がないといった家庭で、住み込みや通いで家事や子どもの世話を手伝う女性を雇うケースが増えている。S漁業社区の女性がこの種の仕事に就く場合、必要のあるときだけ呼ばれてこうした家庭へ赴き、家の清掃を任されることが多いようである。こうした仕事は時間給で金銭が支払われ、決して安定した職業であるとはいえない。彼女たちは、「自分は小学校にも行けなかったから、学歴もないし、いい仕事に就くこともできない。掃除することぐらいしかできないんだよね」といって、安定した職に就けない自分の運命を嘆くことがある。しかし、その一方で、長らく小さな船で生活してきたS漁業社区の女性たちは、漁のための道具でもあり、寝食の場ともなる船のなかをきれいに整理・整頓し、甲板をぴかぴかに磨きあげる清潔好きとして知られてもいる。そのせいか、周辺地域の人々からは、清掃を頼むならキレイ好きなS漁業社区の女性に、と多くの指名を受けることができるという話も耳にすることもある。
- 13) 先述の嚴昌洪は、論文のなかで、現在の広東省・広西チワン族自治区・福建省に生活の拠点を置いた水上生活者「疍戸」たちは、ほかの「賤民」と同様に、清朝期になって「賤籍」から除籍され、法律上は一般の「四民」と同等の地位を手に入れたものの、清朝期には事実上、「賤民」として社会の最下層におかれたままであったと指摘する。それは、「疍戸」たち「賤民」の側に自由・平等精神といったものが芽生えておらず、「賤籍」からの解放がきわめて受動的なものであったためであるという。民国期になり、階級社会そのものの基盤が弱まりはじめ、西洋的な「人間が生まれながらにして持つ基本的な権利＝人権」「自由・平等・博愛」といった観念が中国社会にも伝わって、「賤民」もほかの人々と同様に人間であり、彼らが差別や辱めを受けるのは人道に反することであるという意識が「賤民」のあいだにも、また知識人たちのあいだにも広まっていった。こうして、民国期になってはじめて各地の「疍戸」はほかの「賤民」とともに自らの復権闘争に参加することができるようになったのであり、彼らの真の解放は、民国期になって勝ちとられたものである、というのが嚴昌洪の主張である [嚴 2005]。

現在、S漁業社区の人々のあいだでは、連家船漁民たちが真に解放されたのは民国期ではなく、中華人民共和国が成立した後のことであると考えられることが多いようである。これには、国民党による民国期の政治を認めることがなかなかむずかしい国勢も関係しているようだが、実際に、現在までに伝わる連家船漁民たちの苦しい想い出話というのは、民国期のことである場合が多い。たとえば、連家船漁民たちが捕ったあわせて20斤（1斤＝500g）の魚を陸地の「漁行（＝魚を売買する店）」へもっていくと、「漁行」は難癖をつけ、「食べられるところは10斤しかないから、10斤分の金しかやらない」という。それでも、「漁行」たちが魚を売るときには、20斤分の魚として、さらに高値をつけて売るのである。「漁行」たちは、地元の水上警察などと結託しているので、連家船漁民の側は手も足もでない。こうした状況に加えて1938年、国民党政府が九龍江を48日ものあいだ封鎖した際には、すべて

の連家船漁民たちが漁にでることを禁止された。魚を捕ることのできない連家船漁民は、食料も現金も手にすることができず、餓死する者、生活のために泣く泣く子女を売りにだす者が続出したという。S漁業社区の人々にとっては、新中国が成立した後、自らの独立した自治組織を立ちあげることが可能になった段階ではじめて、本当の意味での解放を勝ち得たということになろう。彼らがどのような経緯で自治組織を成立させることができたのか、その点についてはより詳細な調査が必要である。

- 14) ここまでみてきたS漁業社区の歴史については、連家船漁民として生まれ、S漁業社区で長らく生活してきた張ジュシン氏が居民委員会の命を受けて書き綴った『連家船』という資料集を参照し、そこに、わたし自身の調査生活で得られた理解をあわせこむかたちで描かれている。この資料集は、正式に出版されていないが、わたしの調査生活になくってはならないものとなっている。長いかかわりのなかで、わたしに快く資料を提供してくださった張ジュシン氏に心から御礼申し上げます。これは正式な出版でないため、また張ジュシン氏がわたしの調査対象地域に暮らす1人の成員であり、わたしが今後、論文や調査報告のなかに彼の本名を登場させることによって彼に何らかの不都合が起こることを避けるため、本稿執筆の現段階では資料集の執筆者の名を仮名としておきたい。
- 15) なお、わたし自身は、旧暦5月5日を中心としておこなわれる一連の儀礼を総称するような語を、S漁業社区であまり耳にしたことがない。『五月初五（＝5日の意）』にはお前も来るだろう？」と、日にちだけを取りあげてこの期間の儀礼を指したり、「おれも『爬龍船（＝ドラゴン・ボートをこぐの意）』に参加するから、写真撮ってくれよ！」と、端午節期間において儀礼の中心に据えられる龍船のみを取りあげて儀礼全体を指したりする場合がほとんどである。しかし、本論では便宜上、中国国内で一般的に通用している「端午節」という語で、旧暦五月五日を中心とした一連の期間を表すこととする。
- 16) 主に、羽原 1963 196-197ページ、可見 1970 129-136ページを参照。
- 17) 陳 2007 11ページの「厖」の項目では、「厖」という語の対訳の1つとして、「神、菩薩」という標準中国語が挙げられている。
- 18) 陳 2007 252ページによれば、漳南語の「公」には、「年齢がある一定以上に達した男性に対して用いる尊称」や「(女性からみて) 夫の父親」、「雄」、「(父方・母方ともに) 祖父および祖父と系図的にみて同世代の男性」といった意味があるという。いずれも、男性あるいは雄性を指すものとして挙げられていることがわかる。S漁業社区に暮らす人々も、日常生活において「公」を用いる場合、この辞典に説明されるのと同じような使い方をする。しかし、神明を指す一般的な呼称として「厖公」という場合、このなかには媽祖に代表される女性の神明も含まれるようである。
- 19) 宋代、現在の福建省莆田市湄州島に生まれた女性で、後に海上・航海を司る女神となつたとされる媽祖、三国時代の蜀の武将である関羽の神格である関帝、また出生地については異説があるものの、宋代に現在の福建省アモイ市同安の白礁に生まれ医者として活躍した後、

神として祀られるようになった保生大帝など、中国全土もしくは福建省南部や台湾などで、一般的に祭祀の対象とされる厩公については、その由来や性格が研究され、明らかにされているものも多い。しかし、連家船漁民たちが祀る厩公のなかには、神像もなく、由来もあいまいなものが多いようである。恥ずかしながら、ここに挙げられた厩公の多くについて、わたしは神像の姿を目にしたこともなければ、その名前、由来や性格を耳にしたこともないというありさまである。今後、さらなる調査が必要である。

- 20) 可児 1970 129-136ページを参照。
- 21) 一般に、紙の上に朱色で「福」や「寿」の文字や蓮の花の絵などを刷り、さらにその上から金箔を重ね塗りしたものを、寿金と呼んでいる。大小さまざまで、1文字分もしくは1つの絵柄分を1枚の黄金として数える。商店や市場でこれを購入する際には、100枚単位で購入することが多い。
- 22) 厩公の家臣は多くの場合、その像はなく、目に見えないものとしてとらえられる。しかし、彼らは大変に大食漢で、毎月旧暦2日と16日に多くのおかずを作って彼らに腹を満たしてもらわなければ、人々の豊漁や毎日の安全を保障してくれないのだ、と考えられているようである。
- 23) なお、この個人厩・角頭厩・幫頭厩という3つの区別は、それを祭祀する人々の関係性を示すのみであり、決して厩公そのものがもつ性格による区別を表しているわけではない。たとえば、媽祖と呼ばれる厩公が、ある家族によって祭祀されている場合、それは個人厩といえることができる。さらに、同じ媽祖が、ある漁船幫のなかの祖先を同じくする同姓グループによって祭祀される場合、それは角頭厩と呼ぶことができる。当然、媽祖がある漁船幫に所属するメンバーによって合同で祀られる場合、これを幫頭厩とみなすことが可能である。
- 24) 神像や廟などを破壊し、一切の宗教活動を禁止しようとする共産党主導の活動がいったいいつごろから徹底化しはじめたのか、またその下で、S漁業社区の人々が実際にはどのような動きをしていたか、細かい点についてはまだわからないことが多い。すべての位牌を焼却するよう命じられても、父親の位牌をこっそり隠しもっていたという話を聞くこともあるし、その一方で、この時期に父親を亡くしたが、ごはんの一杯も、線香の一本もあげられなかった、そのことが今でも悔やまれる、という話を聞くこともある。
- 25) 理事会と、この厩公に精通する年配の男性たちとの区別は、端午節期間におこなわれる儀礼への関わり方にもみてとれる。理事会のメンバーは、S漁業社区の各家庭や、漁船の船長ら、また周辺の地域に住む魚やエビの仲買人などからの寄付金を集めてそれらをすべて記録し、儀礼で用いられる供物などの購入に充てるなど、主に事務的な作業を任される。これに対し、厩公に精通する男性たちは、厩公の祭祀に関わる儀礼すべての中心におり、主に儀礼的な側面の仕事を担うことになる。
- 26) わたしがはじめてS漁業社区の端午節をみる機会に恵まれたのは、2007年のことであった。

2007と2008年は、S漁業社区のなかを流れる小さな河に龍船を準備し、それから九龍江の本流に漕ぎだすという方法をとっていた。しかし、2008年からすすめられた市の事業により、S漁業社区内の河から九龍江本流にでる河口に堰が造られた。まだ本格的な堰きとめをすることはないが、この堰のおかげで背の高い船はここを通過できなくなり、また小型の船であっても干潮のときには水が少なすぎてとおれず、満潮のときには水かさが増しすぎてとおれないという不都合が起こるようになった。龍船にもこの影響があり、2009年には龍船をはじめから九龍江本流に安置しておき、そこまで厩公を運んでから漕ぎだすという方法に変わっている。

- 27) 連家船漁民の人々が、水鬼をどのようなものとしてみなしているか、その具体的な内容については、より詳しい調査が必要である。大まかには、過去に溺死した人が誰にも祀られず、それを怨んで人に悪さをするものとして想像されているといえる。
- 28) 肉粽とは、もち米と豚肉・しいたけ・干しエビ・栗・蓮の実・味付けしたアヒルの卵などをともに竹の葉に包み、蒸したものを指す。また、碱仔粽とは、やはりもち米を竹の葉で包んで蒸したものであるが、どんな材料を加えているのか、蒸しあがったなかのもち米は黄色い色をしており、独特の香りのかす。食べるときには、多く白砂糖や蜂蜜をつける。肉粽も碱仔粽も、S漁業社区周辺の地域では日常的に販売されているが、とりわけ、端午節の時期になると市場に多くでまわるようになる。中国の一般的な端午節と同様、S漁業社区の人々も、端午節には各家庭で必ず肉粽もしくは碱仔粽を買ったり作ったりし、家の厩公に供え、祭祀が終わると自らも食すのである。
- 29) この様子は、本当に戦争の激戦地さながらである。集合住宅の2階から顔をつきだすようにして厩公の到来を待っていたわたしの頭には、上の階の人が火をつけた爆竹や寿金が次から次へと落ちてくる。厩公の輿をかつぐ青年たちは、たびたび火のついた爆竹に足をとられ、「痛い！痛い！やめろ！」と叫ぶほどである。S漁業社区を管轄する龍海市では、最近になって、爆竹による火災の被害をおそれて、爆竹の使用を禁止した。そのため、2007・2008年に比べて2009年の端午節期間にみられる爆竹の量は格段に減ったといつてよい。しかし、あいかわらず多くの人々は秘密裏に爆竹を買ってきて火をつけるか、もしくは爆竹に似せたおもちゃの爆竹を買ってきて、線を電源につなぎ、バンバンバンバンという爆竹の音を安っぽい音色でだすなどしている。これをしないと、せっかく自分たちのコミュニティのなかまで来てくれた厩公に申し訳が立たないと考えているようである。
- 30) こうして、神明を自らの身体に降ろして神明とコミュニケーションをすることのできる人々の呼称として、日本人研究者のあいだでは「^{ダンギイ}童乩」という言葉のほうが通りがよいかもしれない。連家船漁民たちのあいだでも、童乩という呼称が用いられることがある。しかし、彼らからみて、童乩とは、少なからず侮蔑的な意味あいのこめられた言葉であると考えられているようであり、人々はこの言葉を用いることを注意深く避けている。
- 31) 陳 2007 259ページを参照。

- 32) 旧暦5月1日と同様、2009年はエビ曳き船も龍船も、はじめから九龍江本流に準備されており、そこからの出発となった。
- 33) 祖厝とは、閩南語で祖廟・祠堂のことを指している。伝統的に、福建省南部の一般的な村落では、祖先を同じくする同姓の宗族が、いくつかのレベルの祖厝をもっていた。祖厝のなかには、祖先の位牌が安置され、宗族の成員たちがそこに集まって共同で祖先を祭祀する場として機能する。これに対して、連家船漁民の人々は、定住の地を得た現在でも、自らの祖先を共同で祭祀するための祖厝のような施設をもっていない。

参考文献（著者名アルファベット順）

- 陳正統主編 2007 『閩南話漳腔辞典（邦訳：閩南話漳州アクセント辞典）』中華書局
- 範正義 2005 「近代福建船民信仰探析（邦訳：近代における福建船民の信仰についての分析）」『甬田学院学報』2005（6） pp.37-40
- 福建省漳州市水利局編 1998『漳州市水利誌』 厦門大学出版社
- 広東省民族研究所 2001 『広東蜑民社会調査』 中山大学出版社
- 羽原又吉 1963 『漂海民』 岩波書店
- 黄向春 2008 「從蜑民研究看中国民族史与族群研究的百年探索（邦訳：蜑民研究からみる中国民族史とエスニック・グループ研究の百年）」『広西民族研究』2008（4） pp.55-65
- 黄新美、韋貴耀、劉月玲、張建世、張寿祺 1985 「広州蓮花山水上居民体質特徴調査（邦訳：広州蓮花山の水上居民の形質的特徴に関する調査）」『人類学学報』4（2） pp.173-181
- 可児弘明 1970 『香港の水上居民—中国社会史の断面』 岩波書店
- 孟慶梓 2004 「水上居民『蜑族』考（邦訳：水上生活者「蜑族」考）」『華夏文化』2004（4） pp.13-15
- 欧陽宗書 1998 『海上人家—海洋漁業經濟与漁民社会（邦訳：海洋人—海洋漁業經濟と漁民社会）』海洋与中国叢書 江西高校出版社
- 嚴昌洪 2005 「近代東南社会『賤民』群体的復権意識与復権闘争（邦訳：近代東南社会における「賤民」グループの復権意識と復権闘争）」『史林』2005（4） pp.23-26,84
- 張銀鋒 2008 「族群歧視与身份重構（邦訳：エスニック・グループの差別と身分構造）」『中南民族大学学報（人文社会科学版）』28（3） pp.22-26
- 張ジッシン 2009 『連家船』正式に出版されていない資料集のため、出版情報なし

謝辞

本稿に関する研究の一部は、中国国家留学基金管理委員会による2007・2008年度中国政府奨学金の交付と、財団法人日本科学協会による平成21年度笹川科学研究助成の助成金交付を受けて実現可能となったものであり、中国国家留学基金管理委員会と財団法人日本科学協会に対し、改

めて深く感謝いたします。また、自費での留学時代から、日常生活や研究生生活のあらゆる面で助けてくださった福建省アモイ大学人文学院人類学・民族学の朱家駿先生、林琦先生をはじめとする諸先生方と、大学院生の友人たちにも、心より感謝の意を表したいと思います。

最後に、フィールドでお世話になっているすべての方々に、心より御礼を申しあげなければなりません。わたしをまるで本当の子や孫のように生活のなかに迎え入れ、調査生活をあたたく支えてくださっているS漁業社区の方々のご協力がなければ、研究をつづけることができません。みなさまの日ごろからの大きなご助力に対して、厚く感謝いたします。これからも、たくさんのご指導をいただけますよう。

研究余滴

契査某仔

—新たな家族との出会い—

私には父と母が二人ずついる。日本で私を生み育ててくれた父と母。そして、中国福建省の河で魚を捕り、船で暮らす父と母。どちらも、かけがいのない私の父母だ。新たな父母と出会わせてくれたのは、中国での研究だった。

民俗学や人類学の視点から物事を理解しようとするとき、私たちは自ら研究対象とする人々が暮らす場所へ赴き、彼らの日常生活に入り込みながら、その社会や歴史、生活や信仰のあり様について把握していく。三年半前の冬、私は縁あって福建省西南部の漁村で研究を始めることになった。

調査地に入る研究者がまず闘うべきは、孤独感だろう。私も小さな漁村で、始めは異質の外国人として過ごした。カメラを手に村を歩けば、皆「来るな!」という。日本人とわかると、「俺は昔、日本軍に捕えられた。日本人は凶悪だよ」という人もいた。自分が漁村に存在することを拒まれているという思いが、幾度も私を襲った。しかし時を重ねるうち、人々は私と話をしてくれるようになり、やがて一組の夫婦が私を「契査某仔」(=義理の娘)として迎えたいといってくれた。彼らには息子と男の孫がいたが、妻は女の子が大好きで、私を契査某仔とする話が出たのだ。私は契査某仔の意味がわからず、戸惑った。

すると夫のほうで、「結婚しないうちはいつでも家へ来て、一緒にごはんを食べて楽しく過ごせばいい。結婚後は、年に一度贈り物をしてくれればいいんだよ」という。何よりも私を気に入ってくれた夫妻の気持ちが嬉しくて、私は彼らの契査某仔になることにした。こうして漁村で私は、八人の家族に囲まれて過ごすことになった。父母と祖先の香炉に手を合わせ、夜は甥とともに寝るうち、私は居場所を与えられたのだと実感した。すると、私の中に変化が現れた。本の中の「被差別を生きる水上生活者たち」は、「頑固な張さん」「愛すべき甥っ子」という具体的な顔をもつ個人として眼前に現れ、甥が学校で家がないことをけなされたと聞くと、心から怒りを覚えるようになったのだ。

「研究者」と「研究対象」の関係を脱し、自身と「〇〇さん」という個々の関係性で結ばれた人々との交流をとおして、異文化や他者を理解する試みは、民俗学や人類学の基本だろう。しかし私は、中国の漁村で新たな家族と出会い、やっとその意味を真に理解し始めたと感じている。私の研究は現在進行形であり、問題も山積みだが、大切なことを教えてくれた中国の父母に、感謝の気持ちでいっぱいである。

(藤川美代子)



写真1:S 漁業社区を流れる小さな河の
両岸に泊められた小型の漁船



写真2: 古くなった船を岸に停泊させ、
住居としたもの(写真中央)

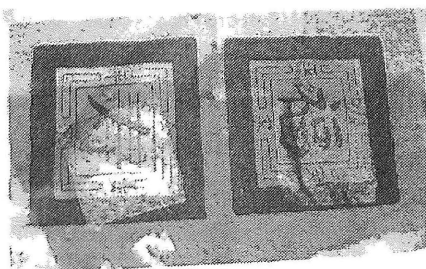


写真3:「福」と「寿」の文字が書かれた寿金

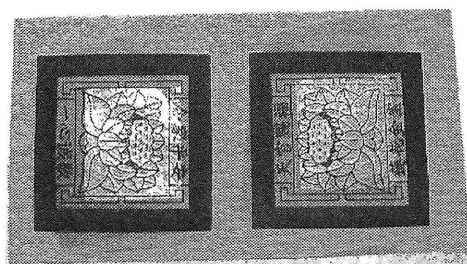


写真4: 蓮の花の絵が描かれた寿金

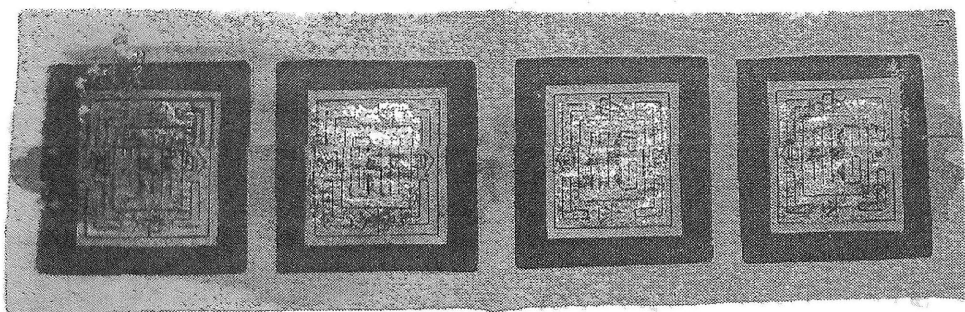


写真5-a:「寿」という字が書かれた縦に長いタイプの寿金

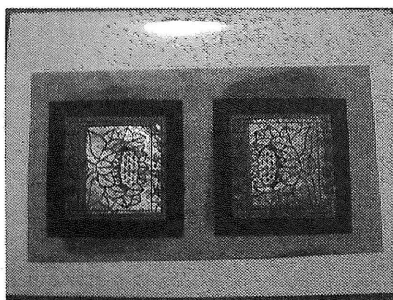
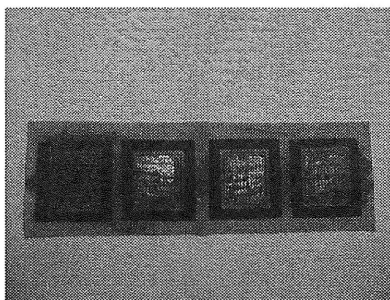


写真5-b: 蓮の花の絵が描かれた寿



左写真5-c:「寿」という字が
書かれた縦に長いタイプの寿金



写真6: 亀糰

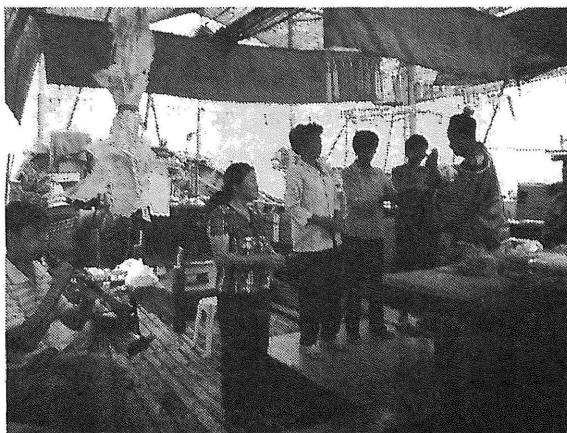


写真7: 船の上に集まり、道士を招いて角頭庭を祭祀する人々



写真8: Z宮



写真9: 水仙王の神像

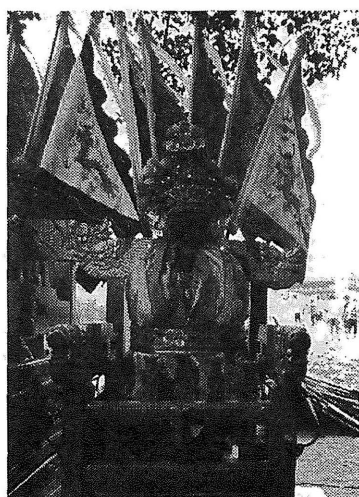


写真10: 媽祖の神像



写真11: 土地公の神像(右)と、傍らに安置される虎爺(左)



写真12: 浄炉

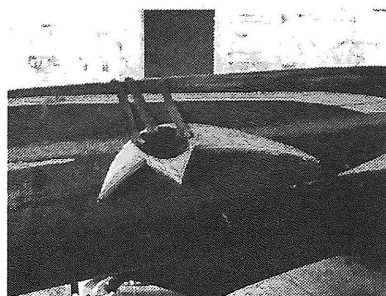


写真13: 龍船の眼に打ちつけられた赤い布

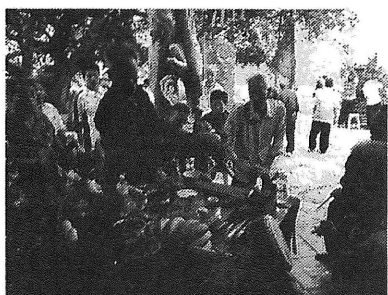


写真14: Z宮の前で厩公を祭祀する老人たち

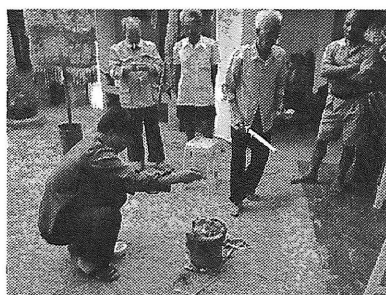


写真15: 用意された炉に札や生米を入れて
火を大きくする老人

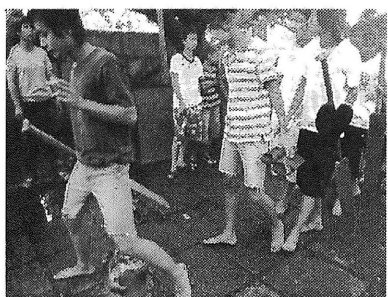


写真16: 履物を脱いで過火をする若者たち

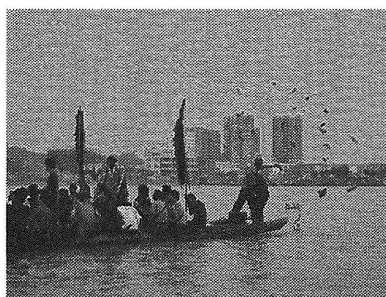


写真17: 龍船の上で寿金をふりまく老人たち

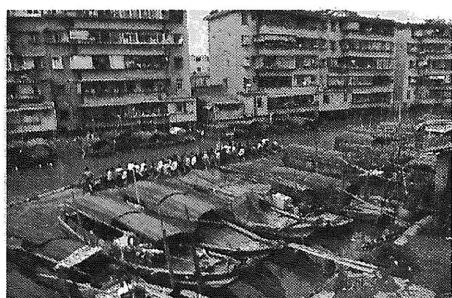


写真18: S漁業社区を流れる河を往復する龍船

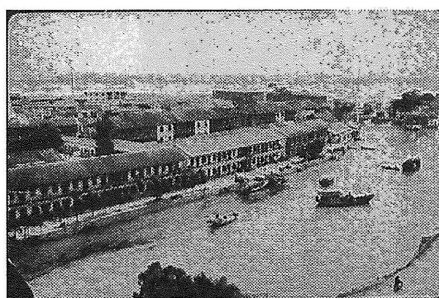


写真19: 1970年代のS漁業社区内の漁港

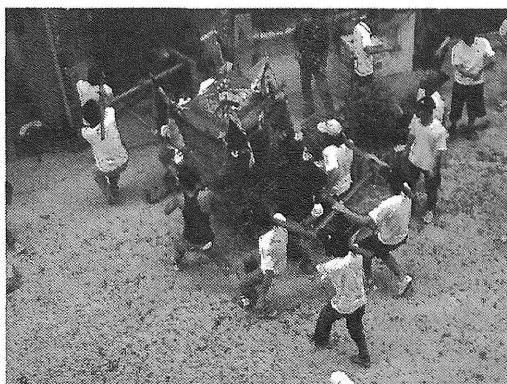


写真20:各家庭を訪れる厓公を乗せた輿

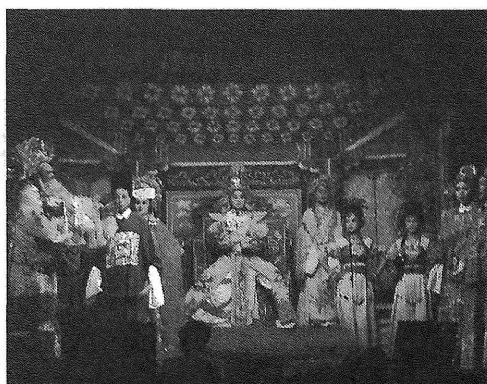


写真21:歌仔戲的一幕

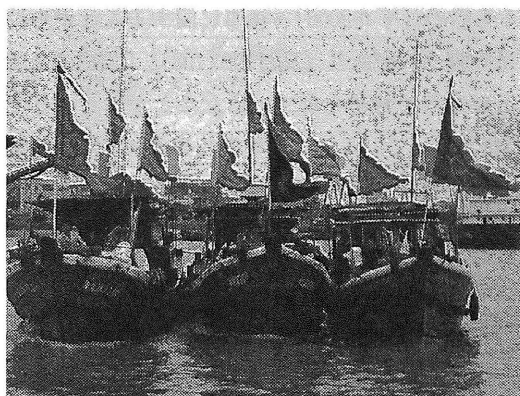


写真22:厓公たちの神像を乗せた3艘の
エビ曳き漁船の乗組員たち

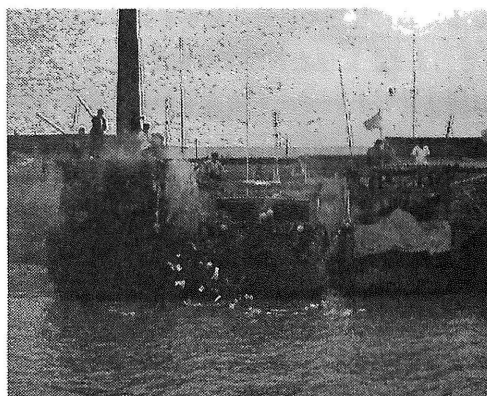


写真23:厓公の到来を歓迎する大型漁船



写真24:王船を九龍江本流の岸边へ運ぶ男性たち

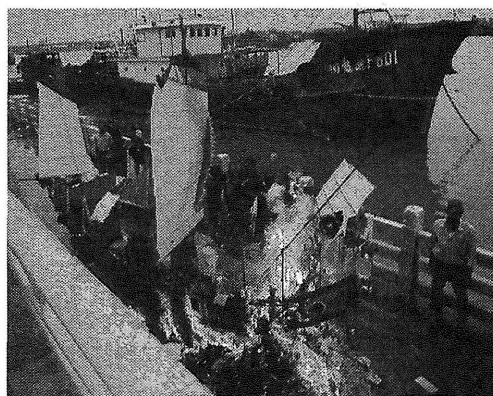


写真25:燃やされる王船